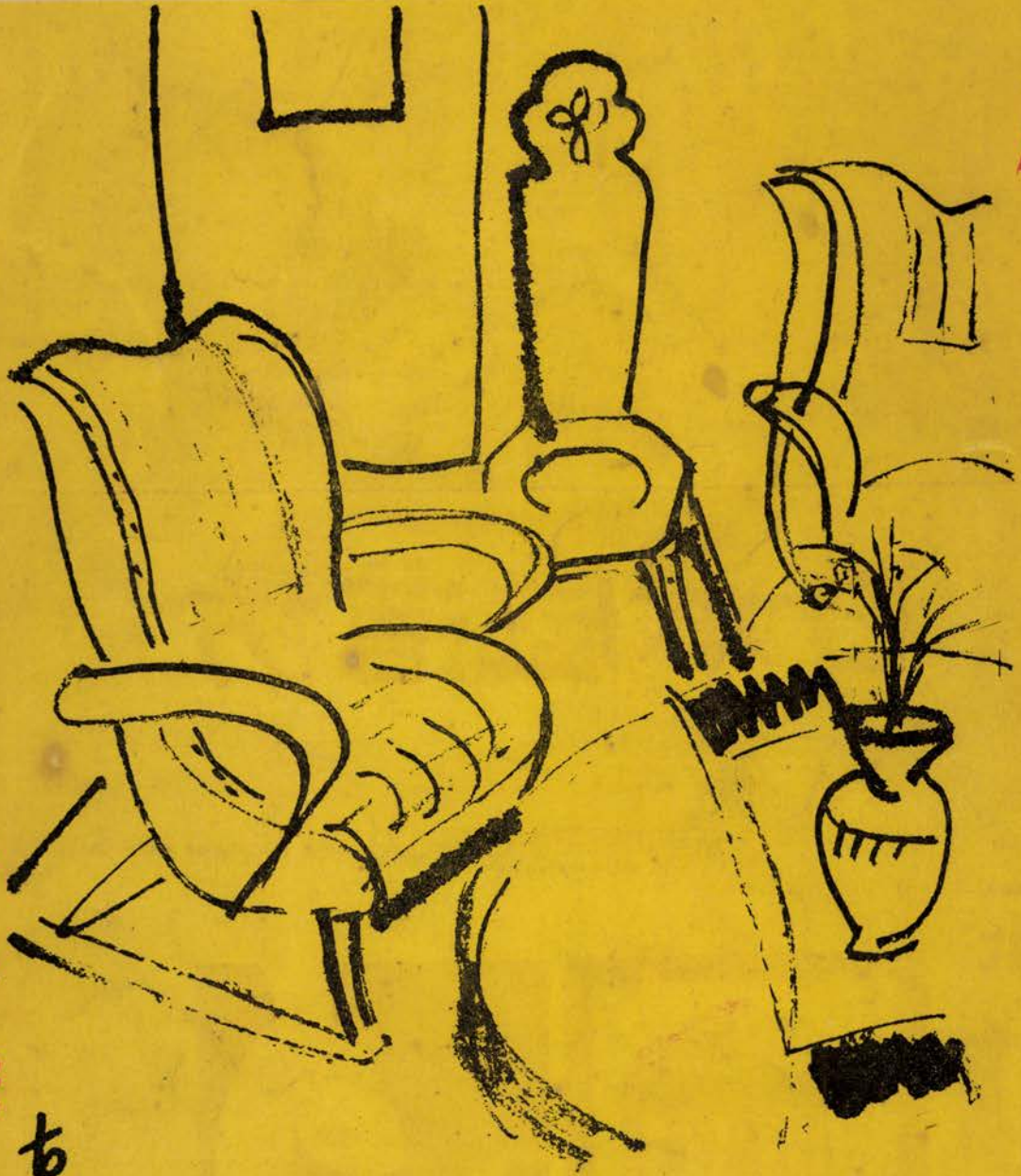


証雅の柳川

麻生路郎☆主宰



新春號

七

No. 392

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

— 2月本社句会 —
 無新空弱
 駄婚気味

川柳雑誌社主催 新春川柳大会

日時 一月十五日(祭)午後一時
 場所 大阪観光ホテル ⑤三五〇八番
 市電道頓堀電停東へすぐ
 (日本橋北詰東入る)

兼題 「成人」(二句) 西井文蝶選
 「さし向い」(三句) 川村好郎選
 「自家用車」(三句) 西尾榮選
 「情熱」(三句) 正木水客選

席題 三題(当日発表)
 麻生路郎

川柳紅白試合
 余興(当日のお楽しみ)
 出席者全員

短冊交換会
 有志の方は各自一葉ご持参下さい。路郎先生も五葉出品されます。

表彰
 ☆昭和三十四年度不朽洞杯決戦
 ☆一カ年間本社句会全出席者

呈賞
 ☆各題三才 ☆路郎選天位に不朽洞賞
 ☆紅白試合優勝側全員に粗賞

会費 百五十円
 幹事 紫香・淡舟・いさむ・文秋・庸佑・狂二・与呂志
 白水・木堂・月都・薫風子・水断・十四郎・一三夫
 ★新春懇親祝宴・会費五百円——散会后同会場にて
 ★投句だけの方は郵券三十円
 同封(〆切一月十三日)

川柳雑誌社句会部

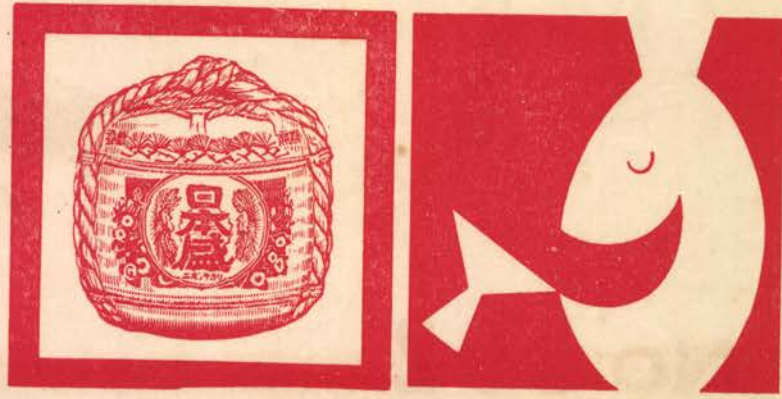
電・住吉 〇六〇八一

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

日本盛酒坊

新年の祝盃をどうぞ!

東京酒坊・八重洲口名店街
 大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



灘の清酒
 二ホンサカリ

不朽洞句帖

麻生路郎

謹賀新春

一九六〇年元旦

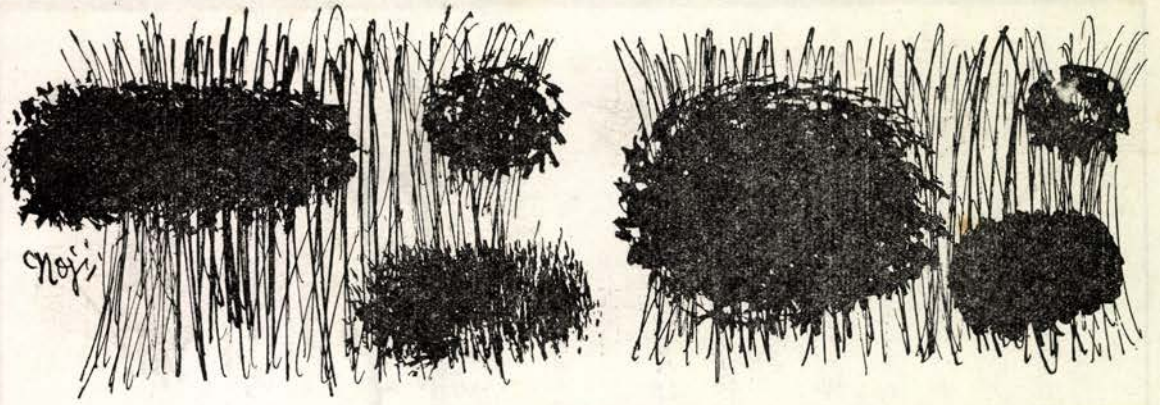


賀状は出しませんよと歳末別れたり
玄関で失礼をするお元日
放送もかけつ放しの三カ日
生み落とされて七十余年をウロチヨロす
灰皿へママのタバコのけむがたち
奥さんの株があたった湯のたより
ゴルフに行きましたと奥さんに云わせ
腰かけで飲んでる寛美見つけれ
下宿でくすぶりデモを楽しめり
怒っても手ごたえのない妻で生き

川柳雑誌新春号目次

不朽洞句帖	麻生路郎	(3)
目的意識を明らかにすること	石原青竜刀	(12)
新春爐辺談義	中島生々庵	(14)
川柳に於ける素材主義と心理主義	麻生路郎	(4)
花嫁さんの話	西川晃	(28)
東野大八	(21)	
集 若い作家に与える言葉	三太郎・木府・夢助・幸男 紋太・佐健・関古・塊入 孝三郎・真珠洞・紫痴郎 風柳・青柳・澄明・文庫 春果	(16)
絵と川柳で表現する歴史	戸田古方	(32)
いのちある句の一解釈	林夢虹	(36)
川柳夫婦善哉	丸尾潮花	(34)
★不朽洞会の人々(川村好郎)	★理事会総会記 薫風子	(44)
集 吾が輩はねずみである	喜由・井平・旅風・呑水 清子・五茶・徹也	(30)
★句評のこと	酒井ひか平	(37)
★手相体験談	杉本一鶴	(37)
明暗記	高鷺亜鈍	(15)
川柳近詠	麻生路郎	(6)
同舟近詠	諸家	(19)
近作柳樽	麻生路郎	(22)
金泥集	北川春巢	(35)
入門講座(研究題・人間)	麻生路郎	(38)
各地柳壇	戸田古方	(45)
柳界展望	★不朽洞会から	(43)
一路集「満期」	丸尾潮花	(40)
「怨」	河村日満	(41)
ベンの散歩	菊田いさむ	(50)

題字……麻生路郎・表紙……戸田古方



新春爐邊談義

麻生路郎

突貫工事というのがある。徹夜、徹夜で、とにかく日限までにやる。

私の年になって、振りかえって見ると、私の人生の大半が、突貫工事で作って来たような気がする。突貫工事には突貫工事としてのいい点もあるが、いけない点があった。もうやり直せないといううらみがある。

私の突貫工事には着手するまでに、必ず十年間は企画を練っている。だからいよいよ着手となると突貫工事になる。この工事には鉄筋の代りに、私の土性骨である、バックボーンがはいっている。従って私の人生ビルが大した出来栄でないとしても後悔はしていない。後悔していないが、私のバックボーンもたいせいに抗し得ず、とんだ敗北をしたこともある。

それは横書きの問題であるが、いつ誰がきめたものであるか知らないが、当然右横書きにしなければならぬものを、朝日新聞まで見出しを左横書きにしてしまった。こ

れは戦時のゴタゴタでアタマのなないのが、

ポストについた時、何か自分らしい改革を

しなければ権威がないと思つてやったこと

かも知れない。見出し左横書きの問題は右

から読んで行く書籍でも、新聞でも、当然

右横書きにしなければならぬのに、左横書

きにして、再び右へ戻つて来る愚(グ)をし

した。書籍や雑誌の題字でも右へ開くの

あれば当然右横書きにしなければならぬの

に、左横書きにしてしまった。医学書や教

学書のように、左から開いてゆくものであ

れば左横書きが当然なのである。この誤り

をいまだに侵している。

右横書きを最後までやっていたのが、日

本銀行の紙幣と、郵便はがきと我が「川柳

雑誌」の題字の横書きだけだったが、こち

らが真ッ直ぐに歩いていても、皆が逆立ち

をしていると、こちらの方が逆立ちしてい

るように思われるので、実務上は不便きわ

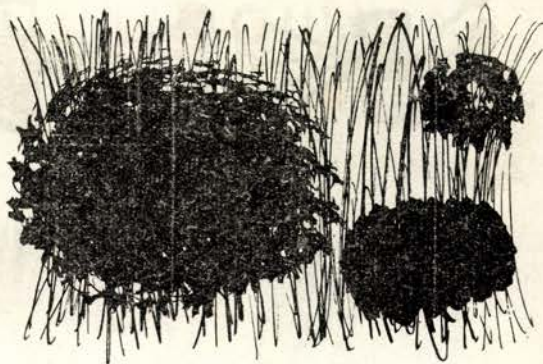
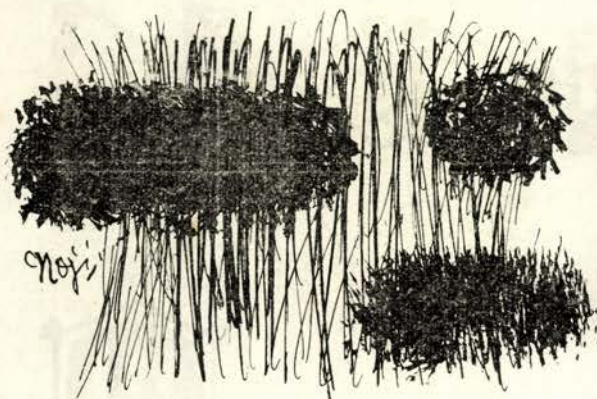
まりないところまで行つた。そこで紙幣の

つたので、我が「川柳雑誌」も世間の人に読んでもらうための題字に外ならぬので、とうとう兜をぬいだのであった。しかし、今でも私は自説は曲げないのである。こんなところに私のバックボーンがあるので、世間の人の云うように、それでは損ですと云う筆法でゆけば、たしかに損であるが私は真理を損得で解決しようとは夢にも思わないのである。

私は短詩型文学のために、生涯の大半を費やして来た。観る人の眼から観たら、馬鹿なことだとも見えよう。しかし、私はそれでいいと思つてゐる。そしてこれまでは一路まいしんして来たが、ここで私の晩年の仕事のために、回顧すること、反省すること、そして新しい企画へと、もう一度突貫工事にかかる必要があると思つてゐる。しかし、これらの突貫工事は至つて地味な仕事であるから、これまでよりも、もっと至難であることを覚悟しなければならぬと思つてゐる。

私は多くの夢をもつてゐる。その夢を何んとかして実現させようと云う、ムダなように見えてムダでない骨折りへ、絶えず心身を費やしている。そのためには、同じ様なことを川柳を通して常に叫び続けねばならない。

お互人類が平和に、その人その人の人生を享樂しなければならぬことは云うまでもないが、それがいつも逆流している事



実を、誰でも知っていないが、どうすることも出来ないことは実に悲しむべきことだと思ふ。宗教家が政治にのさばるのも逆流である。学生が政治に口ばしを入れるのも逆流である。政治家が自己のためにのみ動くのも逆流である。政治は藤樹先生一人あれば足りる。百のフルシチョフも百のアイゼンハワーも要らない。世を混乱させるものは多くの政治屋でしかない。

○
ここで私は人間陶冶の詩、川柳を登場させなければならない。

人間は一人では住めないと云う前提の下に、人間と人間の集合体が幸福に暮らせるための、融合剤として人間陶冶の詩川柳を盛りたいのである。世のすべての人々が、川柳を創作することの不可能であることは、云うまでもないが、創れない人々は読む、読めない人々は聴く、聴けない人々は匂いのかぐ、斯くして、心の和やか、豊かな、朗らかな、素直な人間性を創りあげたい。

その第一課として、

人類は悲しからずや左派と右派の句から噛みしめて欲しい。これを充分にそしやくしたら、社会のイザコザの大半は霧消する。

静かに、今の世の中を覗いていると、実ににがにがしいことばかりだ。そのにがにがしいことの多くが各人の物欲に繋がっている。非常に難かしいことには違いないが、その欲を最少限にまで捨てることである。

西哲ゼオグネスに倣うまでもないが太陽の光に浴すことをお互いはあまりにも考えないのではないか。サンルームは患者の独占物ではない。万人等しくこれをほしければならぬものである。人類の不幸はそれを忘れてあらゆる物欲に走るところから始まる。おそろしい話ではないか。

○
人口が過剰なために、いろいろな争いが

起きることは周知の事実である。これを放擲しておくのは政治家の重大な過誤である。黒い羽根の運動を起す前に、選挙法違反に多額の金品を費消する徒輩の全財産を没収する法律をなぜ作らないのである。徳川時代の欠所制度、処払い制度を作れば、炭鉱労働者を救うことは易々たる問題ではないか。数千万円を費消して逃げ廻るところに、既に有罪を自ら知っているのであるから、裁判などというまどろこしい方法によらず直ちに欠所し、名義変更等の悪質等を調べれば充分なのではないか。名誉欲や物欲で議員になる徒輩を、この制度で一掃すれば、公明選挙に多額の経費を投ずるにもあるまい。私の生きてる間に、アッというような政治

家が出ないものか。私は下手な自由論や人権論は聞きたくない。悪質な徒輩や社会へ害毒を流す徒輩を一掃するためのワンマンならワンマンも又歓迎したい。一つの事件を十年以上もかかって、裁判していることのいかに愚かなことであるかを思うて笑いがとまらない。

○
政治も、裁判も、川柳を通してやれば、もっと簡単に、もっと朗らかに解決がつくように思う。例えば競輪だが、斯界の振興が目的だと云うのであれば、車券を売らずトバクの具に供せず、主催者がテラ銭をとらずにやることである。それでも充分に楽しめるのではないか。その点、競輪も競馬も同断である。何事も大いに割り切ることである。

割切れば太陽さえもオレのもの



結婚式場 長生殿

神殿(2)控室(16)宴会場
(和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか、貸衣装一切を完備しております ●6階

金曜



松坂屋
大阪日本橋三



豊中市 戸田 古方

ぬくみうれし妻の敷寝のズボンはく
戦争の本はスラスラ読みなし
ならべればメガネだけでも三つもち

大阪市 市場 没食子

十代の気まま生命を軽んじる
赤字から社の野球場も草が生え
封建性払拭できぬ年齢を憂き
神の愛いいえあなたにすがりたい
相惚れで添うて家裁の世話になり

西宮市 若本 多久志

さりげなくよろめきかねん風も見せ
失業をして競輪の道を知り
ハンドルが持て送ろうか乗せたらか
又ふぐを釣って見物一人減り
初めましてとガールフレンドへ母真面目
握手してくれたはサビスだったらし

大阪市 正本 水客

鏡台の前のあぐらを邪魔がられ
考える人になってるライターの灯
留守番の子が自転車掃除していた

大阪市 丸尾 潮花

ハイヤーで戻り水道の水を呑み
養子ぼつぼつ小唄の粋がわかりかけ

彦根西明寺の奉納舞踊に出て

見物とカメラが囲む舞い姿

大阪市 西 いわを

消費族女に生まれ幸福さ
口蓋し貝は黙ってふり向かず
表情は陶器の如き冷やかさ
無駄な金使えと女言うてくれ

大阪市 武部 香林

老人同士いたわり合うて別れたり
先生と呼ばせ理髪屋親しめず
わが町の本屋が消えてパチンコ屋

鏡台の引出しは早や倦怠期

ホノルル 築山 快夢起

お帰りを蛙が椽に待つて居り
割勘を二つ返事で支払わず
八等身とやらが隠居の氣に入らず

ホノルル 白砂 旋風

女給の亭主雲をば見て暮し
巡查もタイムが来れば追うを止め

大阪市 須崎 豆秋

お手植えと知らずみの虫ぶら下がり
無粋ともいまいち値段段きいて呑み
どうや君雲一つないお元日

ワイマル 羽佐 間柳葉

蓄めてから金に見積る癖がつき
聖歌隊浮世の悪に染まぬ顔

失恋の痛手は金に嫁すと決め

豊中市 福田 妄夢

入院二十日大ならなめて直すきず

水銀は生きてる体温計のおそろしさ

某月某日某時逆転のきかぬ一コマ

奈良県 尾崎 方正

新聞社新聞読まぬ机に居

堺市 吉田 圭井堂

投資するつもりで学費続き兼ね

「さくら」だけ弾けるお琴をせがまれる

割勘で来ても下座へ据える癖

あつと云う間に別れて次と暮してる

山口県 国弘 半休

初孫へあだこうだと肩がこり

初孫をもう保険屋に祝われる

防府市 長野 井蛙

文化の日隣のテレビへかしこまり

狸寝を大阪弁は見逃がさず

一日一善閣屋と知らず席を開け

台風を遮ぎるものが音をたて

大阪市 太田 良子

長男の重みへ母はへこたれる

かけがえのない娘に育てて未亡人

でこの蚊を叩き落せるのも夫婦

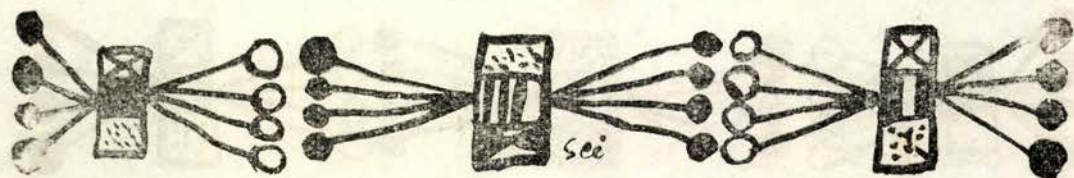
岡山県 直原 七面山

悩みとは二人の休む日が違い

のっけから無情をなじる娘の手紙

曼珠沙華の古りし姿に似たわたし

退院の夫をホルモン屋に誘い



もの言わぬ金魚を愛す日が続き

ランデブーでしようと少女のこましゃくれ

本人はほったらかしの祝賀会

お仕合わせでございますかと先妻が

姉さんが嫌なら私かと妹

大阪市 西 森 花 村

大臣も雇われマダムも似た苦勞

行く所が無いから晦の映画館

わが年を聞かれて酒がまずくなり

お駄賃を貰って返辞忘れて来

鳥取市 河 村 日 満

喜寿を祝して(二句)

喜寿うれし菊の佳き日と重なりて

喜寿呵々と清濁あわせ呑むゆとり

気晴しへちびつた下駄のまんまゆき

紅葉へのついで寺にも寄っておき

倉敷市 木 村 千 容

中正の支柱となつて悔ゆるなし

あなたウンウンで金婚迎えたり

倉敷市 田 垣 方 大

プライベートでは課長を呼びすて

お正月和服洋服着ちらかし

ペンダコも少しふやけた三カ日

本書拙見舞

ここまでが水につかつた掲示板

東京出張

銀座にて銀座はどこと聞いていた

加賀市 野 村 味 平

イエスマンばかり集めて飲む話

さりげなくもう二人目を娘は墮し

ありあまる農家へ今日も獅子が舞い

大阪市 木 村 水 堂

大臣になって良心邪魔になり

人生の終着駅という長柄

そむかれた子へ寝付かれぬ夜がつづき

子を思う角度が違ふ父と母

高槻市 福 田 丁 路

四季夫々の花を咲かせて侘住居

借金山の山を天晴れ苦にもせず

高級と名乗る旅館で肩がこり

運命と云えばそれまで心臓麻痺

昭和三十五年元旦

明治、大正、昭和と五十五年生き

大阪市 真 鍋 一 瓢

ゲイボーイ人の爽快物のうち

敬老会焼け難くそうなのも交り

かみなり族を乗せて静かに霊柩車

温室にいやいやながら馴らされて

ともかくも送り出しときゃいい夫人

大阪市 後 藤 梅 志

この位生きても探しものをする

まん中の部屋にかたまるお元日

鼓でも打とかと屠蘇がまわりかけ

米子市 小 西 雄 々

赤帽に疲れが見えるサロンプラス

下請に出すピンはねで二号もち

本籍を言わぬ男に養なわれ

高辨を渡れるピアノに妬けている

大阪市 山 川 阿 茶

揚幕で出を待つ馬がくしゃみする

十二才のパンパンボリスをあきさせ

暗やみのボリス暴行かとあわて

大阪市 金 井 文 秋

合オーバひねもす提げたまま歩るき

輪禍に愛児を失なえる人に

追憶にせめて「少女」を買いつづけ

加賀市 那 谷 光 郎

こう云えと使いに嘘を頑張らせ

流行を派手に着ていて赤チンキ

こんなにも扶養家族の飯茶碗

利用価値ある人だから酒を酌ぎ

大阪市 北 川 春 巢

サーカスのマイクつぶれた声もよし

若旦那やっぱり読めぬ軸をかけ

更年期とかで奥様書を習い

結婚式産む子の数もきめており

こそ泥の被害が記事になる名士

待てば海路の日和があるをつい忘れ

岡山市 浜 田 久 米 雄

置こたつ冬は背中丸の丸さにい

顔色を見られすこうし気が疲れ

団体の汽車ひや酒をまた酌がれ

バスガイド数字のそこは念を押し

岡山市 逸 見 灯 竿

柿泥棒登れば月が雲から出

紅一点昔のことになりけり

先生の威力子供が風呂を焚き



ライバルという表情ですれちがい

出雲市 尼 緑之助

五十過ぎ夫婦喧嘩も声ばかり

子の縁談僕の場合はどうだった

大阪市 水谷 竹荘

現実の恋は映画のようでなし

酒飲みは酒飲む黒田ぶしが好き

鳥取市 杉谷 湖山

アクセサリーなどと煙草もP・R

ビール腹落目になったバンド締め

西宮市 小沢 史葉

三度笠大きく振ったが不入りなり

和服着たナースに見とれけつまずく

京都市 大鶴 喜由

あたしの人撰ぶに言葉過ぎる母

シェーカーの音に動いた咽喉仏

子供の居ぬとこで女房にあやまされ

デートの窓開けばかすむ東山

ああもしたこうもされた森ふた昔

おう寒むとすがりつく娘は抱きましよう

つけ上りそう弱点をチャクリさし

尼崎市 小林 文月

有馬道 道一杯にバスは行く

左前にようよう女性と判断し

除夜共に聞きし友より賀状来し

河内市 西村 梨里

口説くすき見せず妓のはしやいで

働いて働いて終りしものを悲しめり

お帰りの時間ぶつきら棒にきき

双葉よりこんじよ悪して女の子

妓にだまされた話夫にきかせとく

ごきげんさん子のピストルへこけてやり

云わぬ主義無口な嫁となつて老け

もつさりと田舎で暮す一生か

岡山市 福島 鉄児

押しの術で口説き男を驚かせ

決心を女の方からうながされ

岡山市 服部 十九平

子を叱り叱った事を妻に告げ

視察記をホテルで創作して帰り

人間国宝迷惑そうに祝われる

尼崎市 長谷川 三司

銀婚(三句)

銀婚と知って女中の話し好き

思い出を妻簾椅子へきしませて

写される二人新婚以来なり

兵庫県 若林 草右

タクシーにこずかれて越す交叉点

台風の騒ぎへ砂喰う予算組み

熊本市 有働 葉春

あの柄がお前に似合うと通りすぎ

沢庵を刻むハミング新家庭

大阪市 山本 葉光

這うても自分の事をする病苦

飯いじる猫を羨やみながら病み

岡山市 田村 藤波

反対した田もうるおしたダムの水

過去秘めて女独りの裏長屋

岡山市 岡田 夜潮

禪が汚れたころに捕縛され

犯人をしちよう知らずに追っかける

花やかに見えても後妻悩みあり

置物と思うて妻を諦める

玉島市 白井 三林坊

父ちゃんもタイトスカートなど憶え

三男に生まれて社党びいきなり

紅葉狩りトランジスタで株をきき

熱燗を袂で握り気のある妓

見島市 本田 恵二朗

安封筒糊はないかとわめかせる

戦前派新仮名づかいを又忘れ

かけつけて見れば香煙たなびける

末っ子のブランに従い奉り

泥棒のどこか足りないのがあわれ

京都市 松川 杜的

片山津温泉に遊びて

カモ料理柴山鴻は暮れかかる

片山津ヌードの印象だけ残り

鳥取市 森本 法泉子

ベストセラー出した出版屋ももうつぶれ

わらわれていても所得はベストテン

好ましきバラなり妻に逢う如し

岡山市 津田 麦太楼

天照皇大神かけがえのない床の軸

はがゆさにキャデラックを振って見せ

キッス売ってベッベツベツと唾を吐き

吹田市 橋本 幸男



背の君の方の寝巻も持って嫁き

麻雀と酒で旅行はすんじまい

堺市 高崎雄声

銀行で待つ間ソファーにそりかえり

市場籠男がもてばじむさし

酒もって父の日や言うて来た息子

島根県 藤井明朗

晩酌も恋しい山も色がつき

定年が来てもふぐとは親しめず

岡山県 永松東岸

十二月丸めた背を風が押し

お隣の留守に一枝もらうばら

おばあちゃんの口にキャメル一つ入れ

灰色の雨となりけり十二月

倉敷市 野田素身郎

目もまだ見えぬ子にバイバイをして出掛け

乳房ふくませて夫を指図する

子供保険もう大学へやる気でい

大阪市 伊達堰子

その親も尋常出とらん船世帯

骨にする煙はなおも山を恋い

大阪市 不二田一三夫

おれおれと言うたに箒立てたそな

かたくなな学者が父で嫁きおくれ

三日坊主パチンコだけはまだつづき

兵庫県 酒井ひか平

蒸気機関車よ君も身売りか廃業か

童話より子はピストルを撃ちたがり

夫婦善哉に妻が黙って申し込み

大阪府 深見雅堂

井池に住んで政治に目もくれず

外向いた足でひやかしだと判り

役員になって踊りも習わされ

団体へふすまも軸もとり外し

宇都市 津秋六花

和服ばかり着てたら嫁くのかと聞かれ

足音へ急に他人の言葉つき

神戸市 丸川初甫

靴下がたるんで盛装ゼロになり

倅せは台風ニュース寝ててきく

作業服雲を見ている暇があり

ナイトナらと子供をつけて出し

岡山県 池田古心

貧乏で多趣味は是れも親譲り

松尾笑童の死

死ぬとは予期せず妻の膝枕

東京都 石居高志

にんにくの臭いラッシュを黙らせる

あの時に打つべきだった手を惜しみ

その敵は踏まさぬ母の強気なり

大阪府 早川清生

留学の半期は会話習って来

記者クラブ麻雀だけが得手なも居

ひと責めることのはげしさ女優老い

楽団で笛吹いてるへ初老くる

経営の合理化寺に電話ひく

大阪市 武部若菜

芭蕉碑へ車は地鳴りして止まず

報恩講の鐘へ伴せなる老後

お見舞に故郷からごんた連れて来る

堺市 辻圭水

道徳も習ってほしい大学出

川柳で本心言えてほっとする

頭きりかえよと幕間の長いこと

幕まって社長としての電話する

大阪市 児島与呂志

忙ぎ足妻の勝気のままの音

日雇の鍵もいらない家を出る

倦怠期カーテンの色変えてみる

岡山県 野々口美舟

姑の歯ざりりふすま越しにきく

さびしさをここまでつれて来た別れ

一命を捧げた話ふに落ちず

西宮市 小浜牧人

自叙伝が書きたいほどに成り上り

よう言うて呉れたと老の愚痴を聞き

吊るし柿故郷は雪の多いところ

西宮市 菱田満秋

台風に備えたバケツまず流れ

道を説きながら孤独の人であり

兵庫県 前川左文字

紳士にされて手も足出なくなり

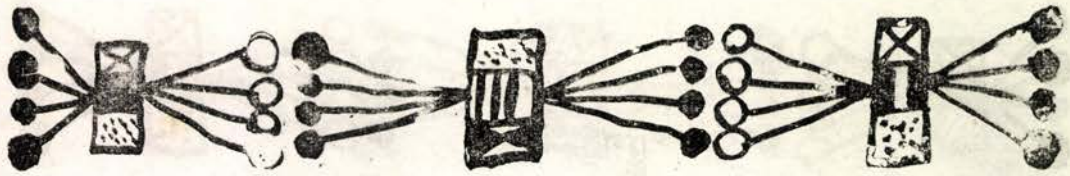
パパの限界見抜いた中学一年生

クレオンは首の黒子を見逃さず

樟脳の香い着て妻どこへいく

大阪市 橋高薫風子

誤って画描きになった人の画よ



右肩を下げて郵便配達夫

下関市 中村九呂平

鉄道を辞めても六時に眼をさまし
駅長を辞めれば娑婆はせまいもの

奈良市 宮口笛生

煙なき煙突並ぶ三カ日

正月やもん葉っ葉服新を着る

いい年であれかし静かなる日の出
ねずみ取りねずみは罪のない顔よ
よく喋る婆さんとなり妻も又

米子市 石坂新雪

マユみじかし故郷を捨て相にされ

大阪市 西川晃

妙なところからから笑う坊主なり

威風堂々エロ本の立読す

膝入れるだけの天地で老いゆくか

万引と根気比べも阿呆らしや

釜ヶ崎風景

ホシを追うデカも疲れて霧沈む

乾からびて子供おとなの貌をする

暗黒が影を吸い込む麻葉窟

鳥取県 田中蛙眠子

控え目に語る糸切歯の白さ

蝶タイで和尚観光バスの客

蝶タイのゆるみへ酒乱出そうなり

秋夜長胃痛おさえの酒が欲し

名古屋 野田一念

金ばかり取る組合の機関紙よ

あの人が何で勲章貰えるの

神戸市 仲 どんたく

串カツに列を作った勘定日

体格のええ奴トルコ風呂が好き

お父ちゃんお父ちゃんとてもてにけり

増築をしてから鼠にもおびえ

人気歌手ただ眠る事をのみ願ひ

平田市 久家代仕男

てんでんてん俵こうして締めるもの

老万は底値ですよと豚を追ひ

山の店無愛想でも売れていき

密談で来たのに退かぬ出しやばり屋

大阪市 本多柳志

自叙伝の妻も知らないエピソード

アブストラクトさかさのままで売れたらし

母へもう子供ではないつづり方

ドロククの味も知っていないポリス

学力の程度左派には成り切れず

出雲市 原 独仙

枯すすき俺の頭髮に似た哀れ

野心の目のがれて妓の身づくろい

婦 郷

ふるさとは良きもの清水のせせらぎや

自分の金でキャバレーへ通い出し

年老いた楽師が奏でる恋の曲

岡山市 江国 幽谷

突出しの辻うらにたりにたり読み

ニタ廻り違う女にすいとられ

岡山市 光 好陽子

電灯のない島に住み文化の日

顔なじみになってしまった焼芋屋

大安日神様少うし疲れが出

西宮市 河相すゝむ

パチンコで取ったんでしようチョコレート

ややこしい事情でんねとねばられる

ビーナツを買うてさかり場漫步する

西宮市 野呂鶴江

妻死んで一人り娘を嫁がさず

金蔓と思えば腹も立てるまい

童心は尊し庭へ虫の墓

西宮市 樋口舟遊

菊活けて明治のよさを恋しがり

手に付いた糊はずぼんで拭いておき

新潟県 高野むじな

うどん鉢灰皿に議論又はずむ

新聞でみたインチキにひっかかり

手品師もやっぱり煙草買いに来る

大阪市 竹内千里

やれボンだチーだとパバはよく遊び

大阪市 欄 蘭

ずぼら者奨励するよな炊飯器

友情にかけて孤独な暮らしをし

遠足の余りのガムを子にもらい

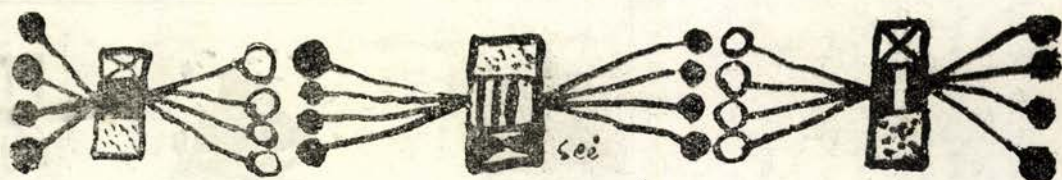
大阪市 石倉旅風

歩いても乗っても京の北の秋

二級酒で唄の出るまで飲んで呉れ

手に持っているもの探すほどあわて

大学を出たのに言うことよう言わず



嘯みしめてみればお説の通りなり

大阪市 魚住 満潮

西成界わい(八句)

西成にやっぱり居った実の親

昼飯をぬいてせつせと銭を貯め

別れ話関西線の終が行く

コロシカタキカサツの電話が鳴り続け

倍にして返すと千円持って行き

街頭トバク刑事は向う側を行き

霧の中日雇の列まだ続き

ケンカなら外へ出てやと片づける

堺市 田中 狂二

一生を台無しにされたまだこがれ

大阪府 林 昌男

君に貸したらとあつさり断られ

客種へ仲居耳打ちされて来る

ここだけの話を妓にも聞かせ

愛媛県 村上 旭童

あきもせず麦をまだまだ播きつづけ

よる釣にいく体力をうらやまれ

恐るおそる叱言いうてるとは知らず

倉吉市 太前 鳴恍

妬いているよその夫婦がおかしくて

農繁期モンベの足を組んで食い

鳥取市 北村 三步

話し合いた四分六ですすめられ

意見ではないらしぶつぶつ云っている

神戸市 傍島 静馬

よい客と見たか植木屋しゃべり出し

嫁の荷に光る月賦の冷蔵庫

大スター貯めにかかれば人気落ち

草月流仲仕の力も藉りて出来

笠岡市 木山 遠二

犬猫は好かぬ妻だが餌はやり

誘い合い出歩くくほどに夫婦老い

上席へ並んで座る老夫婦

喧し屋慾でないのが取得なり

大阪市 村山 光輪

国宝の塔見て親を大事にし

岡山市 宗高 矢寸志

理想家が赤字の増えたのに慌て

淋しくて又アルバムを塵払う

昔とは違うと慰め合うて生き

大阪市 河井 庸佑

砂けむりトラック容赦なくあげて

ばった一匹へ町の子の騒ぎよう

大阪市 小島 さぎす

人の気も知らずのろろ貨車が過ぎ

バラックにテレビがあるにおどかさ

女盛りダリヤに競うごとく派手

柳友美美子さんへ

筆不精をみ霊に悔いる日の悲し

大阪府 谷 沢 好祐

小中高救援物資も数がいり

秋晴れへ昨日の風の釘を抜き

泉大津市 高津 徹也

死の抗議それも応えぬ先生なり

ターザンもしない飛込みバスがして

弁当を一つ持つ手に型が出来

愛媛県 榎 紫光

幼稚園ママの着物が増えてゆき

マーシャンで引いた風邪とは云いにくし

久し振り逢って説伏されてくる

青森市 工藤 甲吉

そうこうの妻据風呂に満ち足りる

ハシタだけ飲む気がハシタだけ残り

聖徳太子みんな逃がして二日酔

後ろ手をする癖があるおえら方

長生きは月の背中也見せられる

玉野市 伊原 明林

ライターを社長にばかり使役

小使さんだけは公僕らしい腰

琴の音がとまり出て来たお年寄り

西宮市 門 永三舟

肥桶と鞆を替えて母と去に

発病に無理をさせたとは云わず

大阪市 藤村 梨花

薄倅を包む襟足きれいすぎ

体当り出来ずインテリ世に敗ける

思索していれば病気が寝不足か

蛍雪の功は実らず保護を受け

相生市 富永 夢路

寝に帰るだけの部屋代値上げされ

結納が届きやさしい姉になり

目的意識を

明らかにすること

—若い作家に與える言葉として—



石原 青竜刀

先決問題として、目的意識を明らかにする必要がある。必ずしもむづかしい理論を立てなくてもよいと思うが、川柳に何を求むべきかということ、作家は自身の納得のゆくような大体の理論づけをしていなくてはならぬ。それは自身の「好み」から出発したものでかまわない。よく川柳の初步指導者が「なんでもかんでも、見たこと、感じたことを十七文字に綴ってごらん

十七音の綴り方にとすること、そしてそれが印刷になることだけを目的とし、満足しているようにしな思えない。

なさい」と言うのは、川柳綴り方の学習のために（想念の表現—まじめかた—の練習）無意義なことではないが、それはあくまでも、画でいう素描であって、目的ではない。ところが、今日川柳界の大多数は、何十年のウエテランにいたるまで、この初步的な態度を変えず、なんでもかんでも、見たまま感じたままを十七音の綴り方でやっている。だから、月々発行される柳誌の、おびただしい作品が、ただもうタイクツそのもので、文芸の存在理由としての感動力というものがサッパリ無い。端的に言うならば彼らはただ見たこと感じたことを

十七音の綴り方にとすること、そしてそれが印刷になることだけを目的とし、満足しているようにしな思えない。

ないか、われわれはそれでケッコウたのしいのだから、という「排便」的川柳家が多く、そのような人があるために柳誌経営が成りたっているというならば何をかいわんやであるが、若い作家が、それにまきこまれてしまつては困る。民族文化の発展のために。

目的意識を明らかにするための参考として二三の例をあげてみよう。順序不同で思いついたままをあげると、第一は社会批判である。日常見聞するものものの社会現象に對して作者自身の教養による批判の眼をはたらかせ、それを短詩に表現する。これは僕の信するところでは川柳という文芸の他のジャンルに比較して最も有力な存在理由であるが、人それぞれに好みがあるので、好まない人にすすめてもしかたがあるまい。しかし「敗戦革命」後は俳句界でさえ社会性を必要とするという人が盛んに出てきたほどだから、それは近代文学としての一つの重要な目的であるはずで、本来の性格からいっても川柳の最も大きな機能である。好みは別としても、何びとも社会人としての生活をよきなくされている現代に、社会（政治経済外交など）一切をふくむのものもろにについての怒りや批判があるはずだから、それをブチマケることはできるだろう。そのブチマケかたに作者が現われるとき、感動力のある：タイクツでない：作品が生まれるわけである。そして、このブチまけかたの表現方法として、作者の好みと能力とにより、直叙法と諷刺法とがある。諷刺にもツガチによるものと、ユ

ーモアによるものとある。第二は人間諷刺である。その原始的なものは柳多留における人情のウガチの利いた作品で開拓しつつされた観があるが、時代相の変移にともなうて、また感覚の近代化につれて、その対象も無限に求められると思う。この場合、柳多留のエビゴネン（素材の新しさだけで、内容的に柳多留の精神感覚と異らぬもの）にならないための反省が重要であることはいままでもない。人間諷刺は近代人の命題である「われいかに生くべきか」に示唆するもので、その感覚着眼は各人各様であり、そこに作者の現われる余地十分であるから、感動力ある作品が期待できるはずである。第三は生活風諷刺であるが、これは現代俳句においても重要な内容となつているので、川柳独特の分野を主張するためには、なみなみならぬ苦心を要すると思う。そこで結局これは単なる報告の十七音綴り方にならないために、川柳伝統の要素と伝

色紙短冊

書画用品

大坂戎道

丹青堂

支那セニ、セニ

えられているもの（うがち、ユーモア、か
るみ、など）による表現の技巧を加えるこ
とによって「川柳性」をもたせる必要があ
る。今日の川柳がタイクツだということの
うちには、生活吟が非常に多く、その大部
分が単なる報告ないし記録に終わっている
という指摘が多分にふくまれているのであ
る。これは作者のマスターベーションにと
どまり、他人（読者）を動かさないところ
にタイクツの根源があるということであ
る。読者を動かさないものは文芸としての
意味がない。要するに生活風詠を目的とす
る場合、それが実感であるということにも
たれて、甘く見てはいけない。川柳におけ
る生活風詠ほどむづかしいものはないとい
うことを肝に銘じて覚悟すべきである。

次に重要なことは表現である。目的意識
がどんなに明らかにされていても、表現が
短詩文芸としての緊密を欠くならば、意味
がわかるだけで、読んで感動を受けること
にならない。伝統の五七五調十七音の形式
は一応その緊密性を与えるための標準では
あるが、内容のいかんにかかわらず、千篇
一律のこの型にはめこむことには厳密なる
考慮を要する。のみならず無理をしてこの
型にはめこむことは、現代感覚とのズレを
きたすことが決してすくなくない。そこ
から（型にはめこむこと）きた無理な、あ
るいは川柳家だけに通用する約束的な造語
が、一般人の鑑賞のさまたげになることが
ある。例をあげれば「女事務」「市場籠」
「セールス」などである。「女事務」は
「B、G」でもよいし「オフィスガール」

「婦人職員」など、正しい語を用うべきで
あり、そのために五七五調にはまらないこ
とはなんら支障にはならない。「市場籠」
というものは無いのだから「買物籠」で十
分であり、そうした方が感覚的にもよい。
「セールス」は「セールスマン」でなか
らぬ。そのための字余りは「セール
ス」といった無理な言葉で十七音にあては
める場合より決して感覚的にわるくはな
らない。

もともと五七五調十七音は川柳の基本形
式であって、そうした方が感動力において
すぐれている場合にはこれによるべきだ
が、現代感覚は、しばしばそのような形式
のためにそこなわれることがある。短詩型
表現の緊密性を無視した自由律は否定され
なければならぬが、現代人の感覚をすべ
て原始的な五七五調十七音に表現しようと
することには十分な考慮がはわれなけれ
ばならぬ。破調などということはもはや現
代の川柳には不必要の考慮である。また柳
多留伝統の川柳語法として無反省に継承さ
れている連用形止めの表現は、ギリギリの
ところそれでないならばならない場合のは
か、使用しない方が現代感覚に忠実な表現
法である。前に作者を現わすことを言った
が、内容（目的意識）と同時に、表現もま
た作者独自のものでなければならぬ。そ
うだとすれば、原始的な五七五調十七音に
すべてを託することの無意味はいうまでも
あるまい。要は短詩文芸の本領として一と
息に読みくだされることを標準とし、その
はんにいにおいて、内容に即応した最も緊密

な表現を用いることに新しい作家としての
苦心が要望され、そこに希望と喜びを見出
すべきである。

思うに明治新川柳勃興以来六十年になん
んとして、幾多先人の努力と希望にもか
かわらず、作品的に文学の場に入るべきも
のが、一つも現われず、現代川柳は第二芸
術以下の存在としか認められていない。こ
の現実にはアイソをつかした一部の新鋭作家
は本来の存在理由を否定して、単なる「近
代詩の一分野としての短詩」に川柳の出路
を求めて、意欲的な活動を開始している。
だが、それはすべて川柳というジャンルか
ら逸脱したものであり、用語だけは日本語
を使用しても、内容的には西洋詩への屈服
である。すなわち、民族文化の一翼としての
川柳文学とは無縁のものである。はたして
川柳はもはや現在のものであろうか。はたし
て以上は望みなきものであろうか。僕の考
えるところでは絶対否である。

現代人の感覚における川柳は、ま
だほとんど開拓されていないの
だ。若い川柳作家に望むところ
は、実にその点である。みぎにの
べた僕の主張によって、新しい川
柳の分野を開拓するならば、まさ
にすべてはこれからと言わなけ
ればならぬ。要するにこれまでの
川柳作家は、おしなべてあまりに
も不勉強であり、無自覚でありす
ぎたのだ。単なる「短詩」に走っ
た人々は勉強と自覚はあったが、
その方向をとりがちがえてしまっ

た。「若い作家」に望むのは、これまで、
ほんとうに究明されたことのない「川柳
性」へのあくなき探求である。具体的に言
うならば、単なる「近代詩の一分野として
の短詩」と川柳とのちがいであり、現代お
よび将来へかけての川柳という文芸の存在
理由の究明である。それらのことは、みぎ
にのべたところを実践することによって、
おのずからいとうちを見出すであろう。最
後に僕の信条を言うならば、現代川柳は古
川柳とハッキリ区別するために別個の名称
（例えば「諷詩」）に改めるべきであり、
その内容においては将来わが民族短詩文芸
の最高峰に位すべき希望を有するというこ
とである。そのためには、若い作家たるも
の「決して川柳をアマク見るな」と言わな
ければならぬ。（一九五九、十一月）

アンケート「若い作家に贈る言葉」としてご執筆願った
ものであることを、筆者及び読者にお断わり申し上げておき
ます。

編集局

工業技術院長賞受賞



軽やかな筆味 楽しいお仕事！
適した硬度をおえらび下さい。

HOP 学生 事務 製図

ペン 鉛筆



いのち

中島生々庵

本社のかかげる重要な旗印の一つに「いのちある句を創れ」と言うのがあります。

毎句会の終りには必ず全員によって元氣よく呼称される文句でもある事は最早余りにも知れ渡った事実であります。私はこの「いのちある句」と言う言葉の中から、「いのち」と言うものの持つ意義を少し許りふれて見たいと思うのであります。勿論私が如何に無鉄砲な人間でありまして、こうした哲学的な問題を、十五分か二十分間の演壇で取り上げる程の愚ろかしい冒瀆は犯しません。ただ私の川柳人としての貧弱な生活の中で、限られた拙たない身辺の起伏の線にふれる二三のものを揃えて、皆様と共に考えて見たいと思うだけであります。

この考え方には御異論のある方もおられるかも知れませんが、私のこの考え方から致しますと「いのちある句」が必ずしも後世永く名句としてものではやされるとは言いがたないと思ふのであります。例えば此処に沢山の方がお集りでありますが、殆んど皆様の全部が千差万別、各々違った柳歴、才能、環境等をお持ちであります。言い換えれば、各自の実力も二等兵から大將の位までの違いがあります。その皆様が「いのちある句を創る」と言う事は、自分の実力の総てを動員して真剣に打ち込んでゆく、ほんとうの自分の血をかよわせてゆくと言う意味であつて必ずしも万代不易の名句を作ると言う意味ではないと思ふのであります。私のような二等兵は二等兵なりの真剣であり、大將の位の方は大將としての真剣であるのであります。そこに名句、不名句の差が出来て参りました。真剣と言ふ尊さには何等差別はないのであります。或いは自分のほんとうの血をかよわせると言う誇りには全然高

低はないのであります。

こうした事は単に川柳の作句態度に限った事ではなく、人の世に生きて行く上のあらゆる面にも大変必要な事は論を待たないところでありまして、社会の一員として与えられた各自が自分の全能力を振りしほつて真剣に何事にもぶつつかつて行く、その姿そのものが「いのち」であるとは私は解釈もし固く信じているものであります。

私は最近こんな話を聞きました。話と申しましても実在の事実談であります。東京に点字図書普及会と言うものがありまして、盲人のために点字の図書を回覧式にお貸しして世の中のいい文章や、宗教や学説、伝説、歴史等と言つたものに対する知識に飢えかつてゐる不倖せな人達に少しでも満足なり光明なりを与えたいと言うのが、その会の目的であります。ところが盲人であり乍ら手の不自由なために点字が読めない状態の人達も多数あり、その人達のために更に、テープレコーダーに収めてこれをお貸しする制度を設け、既に実行に移されているのであります。この福音に対してそれ等の人々の歓び、感謝、或いは知識欲に対する真剣さは全く常人の常識を絶するものがあるそうでありまして、ところが更に最も惨を極めるものがあります。それは盲人であり乍ら手も不自由であり、その上聴覚まで犯された人達が存在すると言う事でありまして、こうした人達は自分の身内に燃ゆる知識

欲を何処に、どんな方法で求め探そうとするのでしょうか。追いつめられたこの不倖せな人達の感情のほとばしりが求め得たのは実に唇の感触であつたのであります。点字を唇で読む。ほんとうに止むに止まれぬ光明探究への真剣さであります。この情景をまのあたり見て来た点字図書普及後援会の会長である式場隆三郎博士はこう話して呉れました。「その狂はしいまでの真剣さと言うものは神の姿と言うか、凄絶そのもので、文字通り涙なしではとても正視出来ないものがあつた。熱情がまゝに我れを忘れて読みふける唇からは、やがて破れて鮮血が流れて来る。それが点字面上に血塗られて、心なしか血なまぐさくさえ臭うて来る。」私はこの話を聞いた途端に粟を生ずるのを禁じ得ませんでした。その尊い姿を胸の裏に想像して見て、つくづく真剣と言ふ言葉の持つ意義には底知れぬ深遠さがある事を今更の様に驚きもし、浮き草の様な私自身の軽薄さを顧みて慚愧に耐えない気持ちで胸が一杯になりました。そして今日の「文化の夕」に皆様と共に、真剣に求める心と言うものの尊さをじっくり考えて見たいとも考えました。

こんな話を聞いて私は、青の洞門の僧禪海を思い出します。大正八年頃と記憶しますが菊地寛が小説「恩讐の彼方に」を発表し、「仇討以上」と言う戯曲化もされて世の中の各階層に知れ渡っている事は余りにも有名であります。二百年前、全く独力で三十九年間、信念と人間愛とに徹したあの史実に流れている「真剣」さは何時の世になつても心打たれるものであります。僧禪海が両眼は勿論全肉体を滅ぼして迄自分の信念と愛に徹した事と、鮮血を流し乍ら唇で点字を読み続け求める心を棄てない今日現存の人が居られる事を並び思い合わせて見ると「いのち」と言うものの実体が判る様な氣も致して来るのであります。そうしてこの厳肅な尊さに身も心も引きしめられてゆく私の脳裡の一個から他の重大な事実が当然浮かび上がって来るのであります。それはとりもなおさず我が路郎先生今日の御存在であります。私は今茲に血塗られた点字の盲人や、僧禪海と同時に先生のお名前を挙げるには余りにも心痛むものがあります。然し私は敢えて申します。五

ヒゲそり後に...

●美容衛生剤 G11
●アラントイン
●水溶性



男性

200円 アストリンゼン

十余年川柳に生き川柳に徹し、練の路の幾山河。川柳の社会化を生涯の旗印とし、鉢を張って文字通り血みどろに御奮闘を続けられた五十余年。その鬱積した疲労が爆発した先年の御大病。これを飽く迄も克服し今日再び第一線に立つて夜を日について全く席のあたたまる暇もない現状。こうした事から先生の御心情を拝察し上げる時、一挺の鑿と槌とで三十余年間うむ事を知らなかった僧禪海の愛の信念と、血にまみれながら、盲人が尊くも精進する求める心と。そこに先生のお姿が私の眼前に錯綜して来るのを如何とも致し得ぬのであります。

先生はあまり御自分自身に関し



明暗記

高 鷲 亜 鈍

元旦だせめて眼鏡を拭きましょ

路 郎

平常は眼鏡の玉を拭くまもない多忙な毎日を送っている路郎師が想像される。幾年に廻ってきた元旦の句であったか私は忘れたが終戦後の扉句であったように思う。

路郎師は余り過去を語らない。

句は現在を詠むが明日につづいて。路郎師の過去は、その伴侶である豊乃女史と共に悲戦苦闘の

ては複雑な御心境をはっきり表現する事を避けてはおられますが、時折「自分の原稿用紙の中に顔を突っ込んだままで死んでゆくのが念願だ」と言っておられます。言葉で代えて言えば「自分の生涯が終る瞬間まで自分の悲願成就、信念達成のために、叫び続け、書き続けるのだ」と言う意味なのであります。十字架を先生お一人に背おわせて、啞然なところもなく眺めているかの様な私達の姿が先生をとり巻いているのが現状であります。その私達の耳に僧禪海が打つ一打一打の鑿の音は「いのちある句を創れ、創れ、創れ」とこだまして聞こえて来る様ではありませんか。(本社句会の席上から)

て文化祭、芸術祭の百花繚乱の巷と化すことであるが、たまたま四〇〇号祝賀記念はそれに魁がけ大々的な催の計画が今より起案されるであろうことは想像に難くはない。

昨日のように思われた路郎師の還暦祝に贈ったブロンズにみる眼鏡は、いまだに痛まぬままに早や十年を閲し、古稀記念の「旅人」句集上梓から三年目の迎春が巡ってきた。

喜寿への挑戦眼鏡を拭う遅さえないわれわれの「川柳雑誌」もN〇・392の新年号を見、今年の九月号では、かっきり通巻第四〇〇号の年輪を刻む。

私もまたその頃まで何かと筆マメに精をだし、路郎師と不朽洞会の諸賢の末席にはべらして頂き、芽出度かる可きこの最良の年にあやかりたいものと念願する。

凡聖一如元旦のころ知る

路 郎

惟えばこの数年、除夜の鐘を境にして、凡聖一如に元旦のころを知ったことがない。もともとその以前だって、心気を澄して跏坐三昧に入っとうしようとも考えたことはないが、三十二年の五月、緑内障でブツツリ酒気を断つて以来、元旦たりと微酔に初心たり得ず、除夜の鐘どころか、大晦日から飲みつづけ泥酔のほてに元旦を迎えたひとりの前後不覚をついぞ見ない下戸になった私である。

元旦のころを知りたくば、酒仙になることだ。たとえば酎によるチュールパッションは安手の凡人で深夜の駅のプラットフォームで真新しい下駄を桂馬に飛ばし、大の字になって昏睡している酔漢は聖人と一如になった姿といえる。その平和な顔へ元旦の朝日が輝けば、この名句にお詠えむきである。

(止筆)

★ 昨年十一月二十五日、この稿の止筆のまま宿病の緑内障効発失明に陥ち入る。二十九日入院手術決行、しばらく執筆読書を堅く医師より禁ぜられる、はなはだ残念である。

実は三年以前より麻生路郎伝(小説)の想を練りつつあり、直接路郎師にあたつて、師の生い立ちからいろいろとお伺いしたり資料蒐集につとめており、新春号からボチボチ連載の形式で何年間に亘って執筆するべく予定を立て、今回の拙稿はその序曲になつたところである。

考えれば麻生路郎伝はそのまま現代詩の川柳歴史と言える。昨年暮、発表した「月へ行く道」は、詩川柳史を試みたものではあつた。

たがご承知のように相変らず、ややこしくむずかしい無味乾燥な研究論文になってしまったことは私の柄ではなかったんだ。したがって麻生路郎師を何らかの貌で読者諸賢に展開さすことのほうが早わかりであったと私は思つて随分と力んでいたのだ。しかし、これも不運の致すところ、暫くお預けのままご容赦願いたい。なお麻生路郎師を知る岸本水府氏、堀口塊人氏、梶元紋太氏、岡橋宣介氏、橋本緑雨氏、ならびに不朽洞会諸先輩からいろいろと資料のご提供をうけたことを厚く御礼申し上げます。また詩川柳発表の場を惜し気なく与えてくださった「せんば」「平安」「しなの」「北斗」「現代川柳」の諸誌ならびに本誌編集部のご厚志をかたじけなく思います。

(口述筆記・久米奈良子)

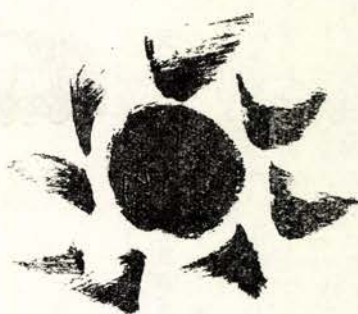
ビールは
アサヒ
ゴールド

・アンケート・

若い作家に

与える言葉

(順不同)



一九六〇年の新春に贈るお年玉として、諸先生方にご執筆を
お願いしました。この言葉の太陽に、すくすく伸びる川柳の芽を幸し
みにしております。
編集局

川上三太郎

「一日一度川柳をおもい
一日必ず一句を書け
わが句はわが子ぞ
愛して誇るな」

「地球を揺く」

「さかくらげ」

など、臭気ふんぶんを流用するのは主と
して青年作家にあるようだ。

「青年よ大志を抱け」より先に
「青年よ創意を抱け」である。

布部幸男

自分の作品に自分自身を生かすことを心
がけてゆきたい。ただその一事だけで、決
して川柳はあなたを見棄てないであろう
し、またあなたも川柳を見離さないであろ
うと思う。

若さということは必ずしも未完成という
ことではない。

前田伍健

強が足りなかったことが思われます。言う
ても還りませんから後悔とまで強くないの
ですが、実質は後悔です。勉強と言っても
果てしないこと、文学一般ですが取敢え
ず川柳関係(和歌、俳諧、前句付、発句、
雑俳)の文献を、人に筋道立てて話せるは
ど読んで置けばよかった、それをしなかつ
た私は自分ながら底の浅い薄っぺらな人間
を感じます。何か人に役立つことをと思う
時、今更のようにそれを感じます。勉強は
今からでも出来ますが、――
日暮れて途遠し。

創意を抱け

岸本水府

青年が新興川柳作家という錯覚がありそ
うだが、年令差よりセンスの問題である。
青年の作品は新しいとは限らない。

「営業用笑い」

浜夢助

一番はいり易くして一番むずかしい川
柳。と私は思っています。

「作家よ初心にかえれ」と常に叫びつづ
けている私、

「満足は退歩のはじまり」とか、深遠な
川柳の道をかくして歩まれんことを。

若い作家

相元紋太

若い作家――それがどんな方か知らずに
申上げるのですが、――私は今になって勉

★俳句王国と言われる松山で川柳道を永ら
く歩み続ける私はこんなに思っている。
「与える言葉でなく申上げる話である」
★川柳を見る目の深淺で作句心の程度が迷
ってくる、深ければ長所も短所もその味
もわかる。浅ければ鼻先きに抜ける、そし
て消失してしまふ。

★初心のお方には「あせり負けぬ気」「う
ぬぼれ」「迷い」の病気にかかりやすい、
早く癒すことである。良薬は多読多作多
知――。

子規の言った「言葉をとるか、律調をと
るか、どちらも大切だが、律調もとも大
切なり」を味わいたい。

★何のために川柳をやるか、自分自身の人
間練成と思ったら励みがつく、静かにしつ

かりと歩む。
★石にもきく心を常に持ちたい。

山路閑古

自身若い作家の積りでいる。今更先輩面をして、何をか言わんやであるが、川柳は理屈よりも実作だ。下らぬ詩論など振り廻りわさないで、一句でもよい句を作り、或る程川柳とはこういうものか。いや全く恐れ入ったと、シンソコ人が共鳴同調するような、そういう川柳家に私はならない。

初心者へ

堀口堯人

きどるよりも素直に
飾るよりも素朴に
街らうよりも正直に
ほんものの自分の
ほんもののことを
大切にして下さい

若い作家諸君への 進言

伊志田 孝三郎

短詩型文学という言い方が何時の頃から生れたのか、その列に伍してゆく川柳の置

位が現在よりもっと社会的に向上する事、内輪褒めばかりでなく他と比較して実際に低徊趣味視から脱する事、この念願あればこそ私達は不断の運動を続けているのだと心得ます。

新春に当って若い作家への進言として私は今更、句の良否選別は申しません。今や川柳は全国的に洵に広く展開している。それは認められながら、他の短詩型のものとは比べて、ともするとその位置を低く見られるのは川柳の本質的な宿命なのでしよう。川柳は非常に精力的です。然しその繁栄力は雑草の、あの旺盛な繁殖に似ています。私達は雑草に、行きずりの人が思わずも立ち止って摘み取らずにはいられないような美しい花を咲かせたいのです。人間の香り高い花。若い作家諸君よ。思い違いしてはいけません。それは今日のあなた方の名吟ではありません。春秋に富む諸君は先ず社会的にえらい人に成ることです。川柳向上運動の一つとして現在の社会的総ゆる方面の地位ある人物を柳界に誘うべきだという説を曾て耳にしたことがあります。一応尤もだと思いますが私はそれはそれとして、将来ある若いあなた方自身がえらい人に成って下さる事を切望して止みません。やがて、この村のあの篤農家は、あの山の畝山主は、あの大会社の社長は、今度の文部大臣は、みんな若い頃から川柳作家で今でも作句に精進している。そう成れば今日私達が賽の河原で小石を積んでいる様な

徒労は必然的に解消するのです。雑草に觀郁として可愛い花は期せずして咲き揃うのです。「青年たちよ、ビ・アンビシヤス」これは何も北海道で先生が袂別の辞とは限りません。諸君の生涯の目的は明朗な人生、立派な社会人としてのあなたの存在と共に香り豊かな川柳はあく迄も咲き誇るでしょう。

屠蘇の酔い男に成れと父は言う

孝三郎

川柳の御へソ

速水真珠洞

単に川柳と言っても多種多様に複雑である、本居宣長ではないが、人の心を種としたもので、其所へ川柳の広場がある訳である、私は約四十年前から、此道に入ったが、初心の折は川柳の軌道に添って、所謂川柳の川柳をねらったものでしたが、三年目頃から、餅屋が餅ばかりねらってはいけなさと氣附いて、其頃愛読していた博文館の太陽なり中央公論、改造などを熟読して、川柳を作り出して見たのです。単に新らしい言葉や文字を利用したから生真に新らしい川柳が、出来るものでなく、国民の思想の貫いて来た、もり上った十七字詩とし

て、むつかしい議論に入らずぬけぬけと自己の反省と社会の動きににじみ出て来るものを作品として来ました。之を異端者扱いにする事は進歩的川柳の出来ない者の事だと思ふ事もつ事が出来て来ました。然し私は働かずマナーを要求する思想的の川柳家ではない、要求ばかりして義務を果さない人間の群には入りたくないつもりです。

明るい生き方をねらって、一路働いて川柳家になりたいばかりであります。只川柳家としても高い人格の完成して行く人を欲して止まない者です。これも複雑なる川柳の一端である事申す迄もない。

有利な条件を生かせ

若い川柳作家へ

大野風柳

最近たしかに人間性というものが変わって

お買物は近鉄へ



アベノ
近鉄
電話 8331

来ていると思う。それは物事を非常に割切
って判断するようになった事で、現代の文
学もそれにつれてドライになって来たのも
事実である。つまり、溺れたり、陶醉する
ことが少くなったと思う。そうした感情よ
りも、支配的な征服感を持ち、善悪の判断
を小気味よくやつのける、所謂ドライの
方向に感情が動くようである。これは若い
人は勿論であり、その風潮は自然に年齢的
の輪郭をひろめて来ておる。

昔から川柳程幅のある文芸はないと言わ
れ、作る層に於ても、又句想の広さに於て
も、それを一つの特色とさえておった。

しかし文芸としてやはりそれなりの真髄を
捉えていなかったならば、よい作品にはな
るまい。

このように物の真髄を把握するという事
はドライな観方、考え方も必要とすると思
うのである。現代の人間性ともっとも調和
じ、びったりと側について離れないことの
出来る文芸は、その性質上からも川柳を第
一に挙げてよいと思う。

若い人は、現代に忠実であり、何の矛盾
もなく身をまかせ、行動が出来る立場にあ
る。このような有利な条件を充分に生かし
て、もっと川柳界の第一線で活躍しなけれ
ばならないと思うのである。又このような
若い人を理解して伸ばしてやるべく、世に
言う大家も努めねばならない時機に来てい
るのである。

むしろ老人は今の若い人の方にあわせる

努力こそ必要なのではあるまいかと僕は
思っている。

しかし又先輩の体験を尊重してゆくこと
を若い川柳家は忘れてはならない。

○

鈴木青柳

私はいつも川柳作句に志された、若い人
と話合う時はその人の希望の柳誌や川柳に
ついては、とやかく口をはさむような事は
しないが、大ざっぱに川柳を始められるの
なら本格川柳から手染めて進まれた方が
将米のためになることを申し添えている。

その理由の一つとして（皆々そうだと断
言は出来ないが）本格川柳から研究された
方がたまたま本格川柳に飽き足りず、革新
川柳に興味をもたれて、その道に曲りその
横道で行き詰りをきたしても、また元の本
格川柳の道に戻る人が多いが、最初から革
新川柳に飛び込まれた方は、行き詰りをき
たせばそのまま戻る道を見つけれず、川
柳作句より脱落して行く人の多いのを見て
いるからである。

川柳と常識

大島 濤 明

私の古い経験が、今の若い人たちに参考
になるかどうか判らないが、主幹からのお

申付けに依えて、昔の思い出を書いて見ま
す。

私が川柳を始めたのは二十才頃で五十年
も前になります。それから四五五年して井上
剣花坊翁主宰誌「川柳人」の同人に推薦さ
れ、それがもとで満州各地の川柳選者に推
されるようになりました。

その頃大連俳壇の先輩だった足立春波老
（当時六十才位）と親しくして居ました
が、或る時「濤明君は川柳をやるから偉い
よ」と云う、「何故ですか」と反問する
と、春波さんは

「川柳は世の中の表裏、人情の機微に精通
し、処世上の酔いも辛い甘いも知って居
なければならぬ、俳句や和歌と違って、
単に自分だけの感情を詠むのではなく、万
般の事象を詠まねばならぬ、それ程多識で
なければならぬ、その川柳を君はやれるか
ら偉い」と言うのだ」と私を賞揚して呉れた
のであった。

私は是迄そんな風に考えたことはなかつ
たが、足立さんのこの言を聞いて、「或る
程」と思った。と同時に、自分は足立さん
の言う如く、何事にも通曉しているかどう
かを反省して、聊か腋下に冷汗を覚ゆると
共に自分ももっとも勉強せねばならぬ
ことを痛感した、それから私は凡有の知識
を求め、事物の真諦を究めることに心を砕
いて、聊か大体の常識を備えることが出来
た。これは単に川柳だけの為でなく、職業
にも生活にも大いに役立ったのであった。

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙
大東市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社



川柳作家は、常に時代の流れを監視し、
世上の万象に注意を怠らず、武道、茶道、
花道、スポーツ、などあらゆる面に対して
一応の知識を養わなければならぬ、殊に選
者ともなれば、他人の句の意味を解し得な
いでは選句は出来ない計りでない、作者に
対し、甚だ申訳ないのであります。

要するに川柳作家に最も大切なことは常
識の涵養であり、今になっても五十年前に
足立春波さんが言った至言を有難く
思うものであります。

どこへ

中島 紫痴 郎

大阪の葉柳誌の皆さんと心を協せて、
東京から矢車誌を出して、詩川柳を高唱し

たのも既に半世紀以上前の明治四十年であつた。

併し当時の川柳界は、久良伎や剣花坊の一ツ派は江戸趣味にこり固まり、而笑子は家庭写生一本調子の中での事として若い我々が満足されないで新興川柳なる作品を発表するや、文壇からは好評されたが、川柳界からは異端視され、新体詩の切れッぱしだの何んのと毀譽褒貶の中を斗い続けて居た。が時代は日を追って私共の考えて居たようになりつつあったが、更に今後はどんな行方をしたなら良いかと又考えて見る必要もあると思う。

以前から私は柳人は、川柳の書物や雑誌にのみ頭を突込でいてはならぬ、一般の詩歌書は勿論のこと世界の詩の傾向にも注目しなくてはならぬ、そして川柳を世界の

にしないでならぬと叫んでいた。斯くて

古川柳が、復興川柳となり、家庭川柳となり、そして詩川柳となって五十年になるも、混んとして未だ意を満すに至らないが、是を世界のどの国にくらべて範としたらいいでしょうか、私は先進国の中でも新しい国のアメリカではどうかと考えられた。

アメリカが一七七六年七月四日に独立宣言をしてより、国作りで夢中であつたが、生活の向上すると文芸が要求され、新英国的で、熱血で、自然を謳ったフレイヤーやライアントなどの詩人が生れたが、哲人エマソンが

手を持たない者は
舌を使わねばならない
狐がどのように狡猾なのは

力がない為めなのだ

と云つた警句的表現や「日々」などの名詩を発表して詩壇を確保してより、夜の声で名を得たロングフェロー「神にとつて労働も祈りも同じ掟」と労働の神聖を謳い、奴隷解放運動につとめたホイッティアー等が出たが更に十九世紀に入るや、旅役者の子として生れたボオは幽玄な美の極致を精緻な形式にうたつて、文学史上に最も偉大な位置を占め、二十世紀の初期に偉大なる詩人ロビンソンが現れ、アイロニーや警句で有名な天才詩人クレインや、自然と対立する人間を描き出して第一の詩人となつたフロスト等が次から次と現れて詩界を賑はしたが其の多くはロビンソンの傾向を襲つて居たのであつたが、其のあたにかい夢を破つ

て、突然に新しい詩が現れた。

夫はシカゴで一九一二年にマンローが詩の雑誌「ポイトリ」を創刊し、無名新人の作を発表したのに始まつた。此新人の多くは各労働界の人達であつたため、お上品な言葉ではなく、生でゴツゴツした騒々しいが力強い生命に満ちた民衆の言葉を用いたことから歓迎されたのであつた。此の作家連の中でも、古い詩と新しい詩との境目に爆発的破壊をもたらした意味で米國詩壇にとって重要な役割を果たしたサンドバークがある。

サンバークは床屋の小僧、芝居小屋の道具係、煉瓦工場のトラックの運転手、ホテルの皿洗、農場の助手其他あらゆる労働に従事し、米西戦争に出征し、除隊後苦學し、大学在学中から詩を書き始め、卒業後は新聞記者、市長秘書などを勤めて居たが、傍ら詩誌「ポイトリ」に「シカゴ詩集」を載せて、其の若々しい力強さと、新鮮な魅力が世人の注目をひき、一躍新鋭詩人として名を挙げたのであつたが、それに対する新聞や雑誌の批評は毀譽褒貶とりどりで物議をかもしたが「世界の為の豚屠殺者」の詩句には大きな驚異と深い感動を与え、貧しい者、悲惨な状態に喘ぐ人々に柔らかに深甚な愛情を注いで、労働争議にも

扱　　べ

堅く握りしめて振り上げられた拳
または前に突き出して広げ求める手
扱ぶがよい

同 舟 近 詠

松山市 前田 伍健

岸首相いと丁寧につきはなし
表装をされる手紙と知らず書き
耳とがり口とがり闘争人で生き
星座論などして職のない同士
金槌も手頃を買わむ老いし妻

須坂市 高峰 柳児

重役の若さに定年小突かれる
こっそりと見合いの写真戻って来
重役のネクタイ禿とつり合わず

敦賀市 船木 夢考

なにが気に入らぬか姑宵寝する
お人よしですと妻の夕仕度

遅れて来ても開会まだ待たせ

今治市 長野 文庫

怒らせて本音を吐かずインタビュウ
人間に聞かす気でないほととぎす
高潮のいたずら不正工事暴れ

和歌山市 秋月 宏方

印でいえば三文判のような僕

新居浜市 月原 宵明

ひょうきんな男で恋と受取れず
百姓の死病畳を恋しがり
炭坑を例えに霜の朝を出る

ここだけの話ばかり持ち歩き
客散つてヤシとサクラが策をねり

おれたちの合議はどちらか一つだと示唆して居るが。私が矢重誌上に

眼の無い魚となり海の底へと思う

紫知郎

の句を発表した後には

骨

おれを海の底に投げてくれ

塩と水の中に沈めてくれ

農夫の犁も俺の骨にふれる事はない

ハムレットだって俺の顎を手にして

かつての冗談も最早なくこの口は

からっぽなどと言いはしまい

長い緑の眼をした肉食の生き者が

俺の眼をほじくり

紫色の魚たちが隠れんぼうするだ

均と水の底深いところで

俺を投げこんでくれ海の底に

と謳って居る、こんな中に戦争が起り、文

化の妨げとはなったが、米国の詩は、欧州

から、絶えず色々な新しい美的な、また

詩的な思考の方法を吸収し、自を豊かにし

て居たが、中でも、若い世代の詩人のリー

ダーとなって居るオーデンは、詩を日々の

経験の記録として用いる事とし、書きやす

いものとした、そしてイギリスの詩人から

自分の必要とする調子や技巧を借りて来

て、古い形式を再生させ、微妙複雑な構成

をもつ詩句の、よほど行間に目を光らせな

いと続き具合がわからないといった難解の

ものでなく、誰にでもその折々の気分、

忠実に詩が書けるようにつとめたからであ

得るからであった。

此米国詩界の経過が、私共川柳の今日に

至った過程に似て居る点に注目し、是れか

ら世に出ようとする若い川柳人は考えなく

てはならぬ。何分にも僅か十七字と云う狭

い枠内に、多くの素材を盛り込んで、それ

を又強く表現しようとして無理な文字を並

べ立てては、折角の苦心作も、第三者には

難解のものとして葬り去られてしまう怖れ

がある、そして現代の多くの社会人は日に

多忙となって来つつあるため、ものを深く

考る時間を許されなくなつて来た。此世相

に鑑みて、オーデンのやり方に倣つて、素材

を誰にもわかるように句にまとめて、自己

の気分の表現につとめ、一人でも多くの入

に感じて貰つた方が、平凡とのそりしは有

るかも知れないが、葬り去られるよりはま

しで、然も現代的行方ではないでしよう

か。

大きく胸を張つて

長野文庫

かれこれ三十年も前のことだが「趣味に川柳を作つて居ます」と云つたところ「変なことを趣味にして居ますね」と笑われたことがある、その当時川柳研究家の石崎柳石先生は当地に在住され高等女学校の先生をして居られたが、或日学校で「川柳の研究をやつて居る」と話したところ「女学校の先生が川柳研究とはどうかと思う」と冷

笑され異端者扱いをされたこと云う嘘の様な話もあつて川柳は卑俗文学として好事家の玩弄物視され、研究家も作家も蔑視されて居たことは事実である。

ところが近頃はどうかです。川

柳研究は源氏物語、万葉集、徒

然草の研究と同様に重視され、

川柳詩味の探求、或は風俗資

料としても研究の対象になつて

居り、作家の作品はラジオ、新

聞、雑誌などに取り上げられ歓迎せられる

様になつて漸く川柳が社会の表面に堂々と

その頭角を現わして来たことは川柳人とし

てまことに喜ばしい次第である。

現在は「川柳を作つて居る」と言つて笑

う人は無いどころか毎年大学入試に川柳が

取り上げられて居るので、川柳を知らない

人こそ恥かしい思いをする時代なのだから

川柳家は肩張張つて「私は川柳作家であ

る」と堂々と名乗つて貰い度いものである。

新人は新人らしく新しい感覚を盛り上げて柳界に新風を送り川柳を更に一歩前進させて欲しいものである。将来川柳作家の益々増加することを望み川柳研究の更に深められることを祈るばかりである。

読書と思索

北川春巢

本誌昨年十一月号巻頭に路郎先生は「考える人となりたまえ」と書いておられる。これはもちろん我々一般川柳人に対して云われたことであり、また路郎先生が云われてはじめてピンと来る言葉である。それにも拘らず私は若い作家諸氏に対し、この同じ言葉を贈りたいと思う。芸がなさすぎるが、「考えてほしい」と。

しかし、若い人々は多くは経験に乏しい。考えるといつても、何を考えるべきかわからぬ人もあろう。そこで私は更に「本を読んでほしい」という言葉を呈したい。本は教養書であれ、専門書であれ、小説であれ何でも結構。極言すれば漫画本でも週刊誌でもよい。要はそれを読んで考えてほしいと思うのである。読んだことを総て信じるのはいけぬ。吉田茂元首相は「銭形平次捕物控」の愛読者だと聞いている。批判しながら読む、ということが大切であらう。

野草千景料理教室



会員募集

大阪クッキング スタジオ

堺筋本町二丁目南50米西側
ユニオン洋装店階上 TEL(25)4943



花嫁さんの話

東野 大八

私の家から花嫁さんが新生活の第一歩を踏み出したといっても私の娘ではない。近所の、私の家とはつながりの深い親戚の娘である。

台風で老犬のように半ば瓦のむしりとられた屋根の下に、傾いた家を支えた白い板ぐいと片面だけの荒壁。話があったときそんな家だからと言ったものの、先方ではうちも同様ゼヒ一つのことにと引受けた。引受けてみてかえって今年最後をおめでたで悪い年を送るのかと思うと万更でもない気持ちになった。

ミス何々といわれた娘だけに、姿見の前で角かくしをつけ終ると後光がさしたような立派さで、他人様にやるのが勿体ないというその母親の気持ちに同感された。女といふものは幾つになっても「お嫁入り」だ「三十九度」だといふと胸の内がカーッとくるものらしく、うちの奥さんも立ったり座ったりでかなり頭へ血が上っているようだった。しかしこちらは、この花嫁姿のケンランさで、うちに娘が三人もいるが今しばらくならこのおめでた、一体どんなことになるのだらうとソラ怖しくな

った。世に娘三人あれば家が潰れるといふが、こちとらなんぞ一人だけでだでさえ斜にかしい家だけにあつという間にべしゅんになること請合だ。

「新婚旅行は白浜温泉で二泊三日ですつて。」と家内が妙に色っぽくそういった。いいものでしょうねえ、というその後のため息にもある通り、私たちは今もってその新婚旅行の楽しさをしらないのだ。路郎先生にあやかっ生きていたら老夫婦で信州なといこうよ、というのが目下の気安めなんだが……。

こんな話のあと、過日四国で母を送った際のスナップ写真がついた。すべてこれらは結婚写真というのはいくつも私とお嫁と大いに関係ありの出来事をすましてきていたわけである。母がなくなつたその葬儀の席へ、見知らぬ若い男がお悼みに現れた。きけば私の娘の好きな人だといふ。家は東京、話によれば早く結婚したいのだが、何分遠い東京での挙式だけに、今年は兄や私はチト遠く行く暇もない、妹は妹で大阪でアパート下宿の女将、板場代用なので手がぬけない。お

ばあさんの忌中もこれに加つて私は今年はずりあつて二人はガツカリという話だった。「そいつは可哀想だ」といふので私は即座に決心した。

「よし、もう二度とわれわれ三人の兄妹が揃うことはないのだから、早速今日にでも式をあげちまおう」

私の一言で第一番に当の花婿が賛成した。父の承諾書も来ているから、ご当家族第で私はその通りにしますと。言葉。輪は若い話せる男と、その言葉に相手を見直したらなかなかもって決くていい男前。よし話は決つたと、母の葬儀の翌日から行動開始、一日おいたつぎの日に挙式と決つた。あわただしい話であるがこれも人生、戦時中の赤紙にはその日結婚、その日出発はザラのこと、現にこのおれだつてそうなんだ、と体験は強い。直ちに準備だ。喪中なので式は仏式である。母にかかったお寺の和尚が話せる人で、そいつは面白い、早速やろうや、ということになり二人して一転仏式結婚の研究に入つた。思えば和尚も和尚、私も私だ。

ぐ上の兄貴だ。母は六つの時に亡くなつていない。弟が一人ある。この姉弟は長兄の庇護の中に育つたものの、じかの内身でないだけにその幼児生活は哀れ悲しい毎日だったようだ。父たる兄が軍隊から軍事郵便でおトギ話を書いてよこしたハガキが今でも私の眼の底にあるが、いまわの際に、兄の眼底に去来して消えなかつたのは幼い私が子のこの姉弟の姿ではなかつたらうか、兄貴みてくれ、今お前さんの娘はこうして花嫁だ。おばあさんも一昨日去つたばかり、後ふりむいてみてやつて下さっているだらうと、私は花やぐの姿の中をみやつてそう感慨を追いつか涙がにじみ出して止め度もなかった。

こうして葬儀の膳が一日おいて披露の明るい膳とはなつたが、うかつな近所の人がある日に黒い水引の金一封を持込んできて大マゴつき。

本

福寿司

心斎橋筋大丸前
電話二三三四番

なもんさ、神式仏式なんぞ一種の便宜主義で太古の昔は、概の一種で婚儀をやつたもんさ、要は二人の信頼感という奴で、仏様がみてごさる上、ホヤホヤのおばあさんの魂までがつきつきりだぜ、こんな固いチギリつきであるもんかね、と私は酔いにまかせてそうダべつたが眼の先に香煙ルルたる白木の位牌があるだけに下世話な世間の法式がやはり気がかりであつたことは本音だ。

「何もよく裸一つをよく貰つて下すつた、よく礼をいいます」と私は式後花婿にそういつて心中より頭を下げたことだったが、相手は、

「これで一生式のこと頭からぬけませんのでかえつていい方法でしょう」

とすましていた。変つていふがエライ男だ、と私はまた改めてその顔を見直したが、温かい胸底からの微笑がしみじみとわいて出た。娘はきつとこの婿どんで幸福になるにちがいない、私はそう私自身にいいきかせるようにして幾度もうんそうだうんそうだと打うなずいてみせた。

式後二人は、大阪の妹のところと岐阜の私のところへ泊り重ねて東京へ帰つていつた。飛石つたいの新婚旅行で出費節約、気がねなしの道中、これも私の発案だつたが後での便りによると成功だつたようだ。ともあれ、式をすましてその日の夜行であつただし四国を脱した新婚夫婦と妹と私だつたが、その車中ふと気づいて「今日は一体何んの日だつたかな」と私がいうとなんと花婿が即座にこう答えた。

「今日は仏滅でした」

(一九五九・一二・六大安の日)

同

野村味平方



坐り込み生徒見ぬふりして通り 愛媛県 竹田 きえ
 豊作へねずみの切手ゆるされる 同
 鏡台に坐れば女生き返り 同
 直ぐ傘を干すくせ三十娘なり 大阪市 西本 保夫
 理想論バーの女給と議論する 同
 表彰をされた途端に病んでおり 同
 障子はり替えて上敷買う話 笠岡市 出原 真奇
 酒の父へそくりあるをもう見抜き 同
 後添えを貰って麻雀嫌になり 同
 新築へ火災保険が祝いに来 布施市 坂上山椒坊
 親の命日忘れ恋の誕生日は覚え 同
 ええしの子機関車捨てて泥をこね 同
 柔道四段歌手には惜しい腕を持ち 日塚市 杉本 一鶴
 しわかくすためのピンボケよろこばれ 同
 千鶴氏三十五日法事へ
 一周忌までは逢えない線香立て 同
 親馬鹿の白髪不肖の子が増やし 宇部市 平田 実男
 皺寄せは母へ集まる子沢山 同
 胸張って歩けば邪心など忘れ 同
 ジンフィズ夜の精気の息を吐き 錦鹿市 吉田 俊和
 のろけ云うて喰う弁当の石を噛み 同
 履歴書と違う字で来た年賀状 同
 いたずらをして一人子ほめられ 愛媛県 和気 久義
 何もかも忘れて今日は飲みたい日 同
 新婚で勤務時間の長さ知り 同
 知らぬのがなにより強味若い人 大阪市 松谷 政俊

青年を元青年があぶながり 同
 要領よく渡っただけで世を終り 同
 郷に従ったか外人のテレ笑い 京都市 都倉 求女
 枝払う人夫も秋の空の中 同
 撮されるときだけ「ミ」を脱ぐ時雨 同
 晴着ふと欲しいと思うほどに癒え 西宮市 末沢 花美
 愛されることも重荷に病んでいる 同
 肌の荒れ女は過去に無口なり 同
 胎教を氣にして妻へ氣を使い 岡山県 杉本たつよ
 ライバルのあごで俵をかぞえられ 同
 若い氣で座れば鏡いやになり 同
 こおろぎと月を残して寝るとする 岸和田市 内藤きさ子
 カナリヤを埋める日葉鶏頭の赤 同
 ビニールの前掛冬へしやちこばり 同
 税金のついた座敷でお茶を飲み 山口県 藤本 星二
 指角力とれる程まで恋すすみ 同
 女房の入歯が光る月給日 同
 金星をあげて無欲をたたえられ 川西市 佐伯 九紫
 仕送りが無ければやってゆけるのに 同
 九九は未だテレビ番組皆覚え 同
 胎動へもう商魂の祝状 倉敷市 小倉美音子
 野良猫の素早さ家の猫に欲し 同
 煮豆屋を呼び戻す間を髪を梳く 同
 しるこ屋へおすそわけ 高知市 須藤 俊江
 失恋の涙を倍にする鏡 同
 恋文の封をキッスのように貼り 同

謹賀新春

国弘 半休
 山口県厚狭町国鉄省宅

玄徳寺ノ内上ル
 井ノ下 晴芽
 全 井ノ下 秀徒

深草相探町
 大鶴 喜由

相國寺北門前
 田中 千潮

全 田中 烏雀

山科西野山
 竹内 九角

全 川田西浦
 柳本 憲一郎

全 岡子奥
 小林 亀一

全 西野山
 平井 絵丘

全 新橋寺
 平岩 司郎

小山東本願
 本儀 親生

部 支 都 京 社 誌 雑 柳 川



裏方御来県

お裏方がむにこまかい金がいり 石川 県

高山 清勝

テレビからハタキかけてる部屋掃除

同

機嫌よい車掌の呼称 スト 近し

同

スピードを盛った若手の仮名手本 大阪 市

半田 夏生

河内風景 二句

耕転機狭い畠はあきたらず

同

東光の寺山脈にひそと暮れ

同

足らぬだけ国にたよって共稼ぎ 大阪 市

堀 風船堂

チップ次第だつせやんなチラと見せ

同

産科医のマスクのまなこ真剣な

同 萬代句念坊

秋拾一寸テレビの前に座し 大阪 市

同 安平次弘道

美容院嘘と見栄とがよくしやべり 美濃 市

同 山岡 半歩

貧困な政治を肴に酎を酌む

同

生き写しですと産婆に保証され 西宮 市

同 野木三又路

中風と云う友の便りに朝冷える

同

臥たままに今日が始まる療養所 松江 市

同 室田 千尋

夕焼けを楽しむごとし吊し柿

同

貧しさの故の倅せ気がつかず 神戸 市

同 室田 千尋

律気さを買われ坊ちゃん付となり

同

平のまま血圧ばかり高くなり 大洲 市

同 室井八九寸

週間の知識で妻にしかられる

同

売出さぬ前に売切れビラを刷る 田辺 市

同 室井八九寸

干し竿の向きを離れから指図

同

大衆の声と署名をしてまわり 大阪 市

同 米浪進之助

よりどりの顔で立つてる女店員

同

また元に話が戻り母の老け 愛媛 県

鳥井 川鳥

重労働恋愛合戦の事でした

同

石橋を叩いてばかり男のくせに 伊丹 市

小川 静観堂

月の裏まだ歌になる幕じやなし

同

つるし柿むくの老眼鏡が要り 兵庫 県

遠山 可住

台風がどっち向こうと種を播き

同

少々の勇氣婦人に席譲る 大阪 市

本村 文福

要領の良さが信用無くしてい

同

妬きもせぬ妻へそくりを歩に回す 須崎 市

高橋 蟠蛇

うぬ惚れの強い化粧に念が入り

同

悪友は生きているかと思舞に来 松江 市

田中 妖人

跡継ぎもやはりお金を貯めるだけ

同

招待の貸切りバスで立たされる 西宮 市

樋口 寿栄

悪趣味ね女泣かして知らん顔

同

呉服屋も家具屋も来ないまま嫁ぎ 大阪 市

宮原 敏子

七五三母も一緒に見て貰い

同

鼻歌で妻貧しさを口にせず 竹原 市

山内 静水

声がわりしてもいまだに要るオッ

同

飲み足らぬ顔が二次会提案し 見島 市

伊丹 柳瓢子

紹介へ独身ですとつけ加え

同

声ほどにない豊作に汗をかき 兵庫 県

齊藤 たけお

背広着る職でお寺もテレビ買い

同

レントゲンの交換もして婚約し 西宮 市

三上 芙路

へそくりの小銭でかかぬ孫になり

同

なにもかも春を信じて冬仕度 今治 市

越智 義夫

川 雑 淀 川 支 部

大阪市東淀川区十八条町一丁目二一

武部 香林
武部 若菜大阪市東淀川区三津
屋中通三丁目二〇武部 香林
西森 花村
武部 若菜
坂田 東洋男
志水 礼司
早川 清生
岡部 三十郎
小島 さぎす
小林 文児
松下 灯子
木下 尚徳
綿谷 全信
種谷 敏明
村上 和楽
木村 水堂



恋の色絵具の箱に見当らず	同	絶交状送り返事を待つ心	同
すき焼の匂いへ菊の香は消され	護川 梢月	母校まだ分校場のままの秋	山本 朱紅
明月はアクセサリーとなるふたり	同	大東京の広さをガード下に住み	同
給料を直ぐききたがる癖で平	高橋 尚史	好奇心もあって他人は知恵をかし	杉原 愛鳩
手切金の利子で食うてる子と二人	同	晩酌へ妻はさみしいことを云い	同
弁護士の靴争いだけに満ち	井阪東天紅	奥さんの探知機安い方に向き	篠原佐代子
稼がねば喰えぬと知る今日を病み	同	飛びついた程ホルモン入も効果	同
国賓の微笑早くも海を越え	田畑くにを	山寺の灯がまだ消えぬ月見酒	高木 桃里
任意出頭拒めば派手な記事にされ	同	結婚をしてハンサムが飼育され	同
秋白く澄んで炭焼小屋も昼	塩田 科山	平気とは平気で居れぬ時に云い	奥谷 弘朗
女子軍がギャギャ這入る仕舞い風呂	同	野心なく女に無駄な口がきけ	同
のんびいに出会い招待席流し	藤富 淀月	文化の日野良着で妻は菊を活け	越智 一水
遊学の子へ足しにする二階貸し	同	昇給もボーナスもオールド投資	同
赤ちんを塗って相撲が止められず	土守 蜻蛉	退院が延びて荷物が又増えて	西浜 青路
飲みながらの相談と云うことに	同	日に三度笑えと腹の減る秘訣	同
往診の医者 of 靴が先に着き	辰己忠太郎	サロンパス貼って美容師の秋祭り	福田 祥男
どん底で詩人珠玉の詩をつくり	同	口笛の児に乳牛の素直なる	同
これしきの事で眠れぬ更年期	里田一十	好きになつてからのカラは狂いがち	春田 鎮海
ぜんざい売切れ菊花展つまらなく	同	旅商の苦勞云わずに羨やまれ	同
増築のプラン老人はっとかれ	森本黒天子	晴寒しだけで私の日記帳	井上美恵子
朝星と夜星で老に鞭をうち	同	人生を深刻がつて十八九	同
スベリ台ボスは逆さに上つて来	加川 靖真	干柿ののれんへ秋の陽がまぶし	横山 一声
憲兵の肩そのままの守衛なり	同	耕耨機の故障を牛に振りむかれ	同
麦を踏む足には惜しい靴をはき	鎮浪 翠月	原始からやり直したい世相なり	木村 凉人
間違った事がきらいで平社員	同	酔えば寝る癖で四十才が無事	同
煮詰った討議へそつと窓を開け	板倉天悟空	いねむりも容易ならざり美容院	三井みつ子

謹賀新春

壽ぐ1960年

3・3・3 川柳会

南海電気鉄道株式会社

川柳部一同

友淵 貴山
大阪府泉北郡高石町
五〇六

河本 南牛子
松山市外石井村南土居



三十年目に実母とめぐり逢いて

三十が邪魔して実母と呼びきれず

髪と爪染めても米の飯はくい

特売を目正月した淋しい夜

事故日毎地藏の花も枯れたまま

百万円当った仮定に花が咲き

よくなって見れば医者代惜しく

多忙から逃れる旅を思いつき

退院の友が就職知らせて来

派手な服着ている方が未亡人

技術者の強み定年気にもせず

保険屋の勧誘僕が死ぬ話

たまさかに夫婦で出れば雨になり

着飾って里を光らす七五三

自衛隊への手引本屋で立ち読み

実行へ神の力をかる禁酒

自慢にはなもトップに風邪を引き

高貴でも貧乏揺るぎが玉に瑕

老父母のまだいさかいをする元氣

果物籠の数が大病にしてしまい

賭事が好きで大きくよう貯めず

出稼ぎは危険なドルに望みすぎ

叱られて来た日は夜なべして帰り

甲子園強者どもの夢の跡

芸術の秋へいのちを割りこみ

跳ねて飛んでいずれお嫁にゆく娘

同

宮藤 慈雨

同

島田 雄峯

同

藤田 雪峰

同

稲森けい女

近藤 昭夫

松元 利行

種谷 敏明

檜原 万女

亀崎 漫步

内海 敬太

中西兼治郎

河本南牛史

高木繁太郎

月田北海坊

小林孤呂二

片岡 小風

宮政 周防

松高 秀峰

児玉 不村

加川 大然

川村 山友

白バイに追っかけて欲しいマッハ族

アベックの單車女の云うとうり

お茶漬けが恋しくなった旅の朝

二回ほどかけて得したように死に

倒産してから信心阿呆くさし

ほろくそに云って老妻へ頼りきり

通行証ついてまっかと赤い羽根

生涯を髪の毛のちれた子に産れ

夫への無言の抵抗起きて来ず

神様の名を借り秋を遊んで来

嵯峨の道大宮人を気取ってみ

子宝に張り合いのあるベタル踏む

実感のわかぬ代理の席に居る

寝そべて雨の文化の日の読書

十二月孫にやりたいものばかり

手内職狭い茶の間に活気あり

クーポンを利用し月給これっぽち

倉庫は紙屑ばかり支所という

倦怠期どころではない妻と刈り

御希望は英語を話す嫁と云い

日曜日時計の遅れ気にならず

働ける自信息子をまだ抑え

新患者部屋のジンスクス聞かされる

溜息を先にすませてスード撮り

サービスがよすぎて費用気にか

会長は酒がまわった頃きまり

武田軍治郎

常岡 孝風

齊藤さかえ

野口卯之助

吉田 隆史

大久保 和二郎

森崎信太郎

家根 抱亭

筒井 吉枝

小谷 仙山

村上 和楽

岡崎 祥月

塚脇 笑太

神田 豊年

若柳花乃子

村上 球絵

岡崎 雪美

菊地 白葩

佐内 隆文

酒井 丹謡

今西 生薑

仲上 蘇水

米倉 義雄

村田 淑滋

斉藤 巖

三島 一兆

若本多久志

西宮市津門西口町五〇
電話 ② 四一四三番

社 誌 雑 柳 川

同 一 部 支 寺 浜

川 雑 岡 山 支 部

浜田 久米雄

津田 麦太楼

林 葵丘

江 国 幽谷

光 好 陽子

宗 高 矢寸志

外 一 同

川柳に於ける

素材主義と



心理主義

西 川 晃

「讀物屋は大根の句を、果物屋はリンゴの句を作れば良い」という様な表現で、素材の尊重すべきことを比喩的に述べている一節が、川柳雑誌のいつかの随筆の中にあった（著名な川柳家の文章であつたと思うが、それが何月号で、誰が書いたのかいくら探しても見つからない）。ところが其のすぐ後で、或る批評家が評論の中で（或いは座談であつたかも知れぬ）その言葉を捉えて「リンゴの句を作って何になるんだ。リンゴその物は詩と無関係ではないか」という意味の反対意見を述べて居られた。両方とも原文が発見できないので、言葉は大分違っているかも知れぬが、これから私が言わんとする主題にとって「誰が言ったか、又正確にどう表現していたか」と言う事はそれ程問題ではないので、以上の様な二つの相反する考え方があつたという事実さえ知って貰えばいいのである。前者

は、つまり作句する上に於いて生活と生活に密着した素材を大切にせよ、果物屋がリンゴの句を作れば他人の発見できぬ何かをリンゴから発見するだろう。川柳にはその発見という事が大切なのだという事が言ひたかつたので、写生主義（これを延長すれば写実主義になるのだが）を説いたものと思う。

これに対する後者の論の中心は、十月号の薫風子君の文章の一節を借用すると「此の世で精神を除いては何物も取るに足らぬ」という精神主義的（私は素材主義に對して心理主義と呼ぶ）立場を保持するもので「リンゴや右ころがその辺にころがっていても、そんな物は詩とは何の關係もないのだ。いくらそんなものをひねくり廻して見ても其処から詩が生れて来よう筈がない」と、こう考えるものである。もう少し詳しく言う

一は素材に信憑し、黙々としてそれに従いつつ其の素材を通して真実の相を把握し、表現しようとするものであつて、現実の濁流の中で其の流れに浮ぶ現象の種種相を凝視しつつ、尚これを捉える事によつて其等の個々の事象を超えて自己を完成しようとする意思である。

他方心理主義の方は、美や真実は個人の内部に確乎とした実在として存在しており、外界に散在するもろもろのもの（素材）は単に個人の内部に在るものを外部へあらわす（川柳に表現する）為の道具にしか過ぎないと言ふ考え方をするものである。此の様な本質論はあらゆるものを本質から絶縁せねば止まない。素材主義によつて作られた句は、作者を兼ねた讀者でなくとも、宿命的な詩人やこれに属する特別なグループでなくとも、一通り教養のあるものであれば誰でも其の意味を理解し、其の面白さを充分に享受することができる。つまり川柳が大衆のものであることを作品によつて実証できるわけで、現在、教の上に於いて圧倒的優勢を示してゐる伝統派と呼ばれる系統の川柳は、大体に於いて此の素材主義を主体としてゐるものだといふ観方ができると思う（勿論例外はある）。

一方心理主義は革新派と言われる人達或いは前衛派と称せられる川柳家が主として遵奉するところのもので、自我の確立と完成以外には美も真もないと信じる彼等にとつて、没主観と思はれる（実はそうでないのだが）素材主義の作品は文学という名に値しない低級なものであり、素材は第二義的なもの或いは其れ以下のものではあり得ない。

私は「作品の内容を決定するものは、なまの素材ではなくして其の素材を濾過する作家の個性である」という近代文芸観まで敢て否定するものではないから「生の素材を生そのままに投げ出した作品」や「安易に素材にもたれかかつて作品内容の空虚さをこまかそうとするもの」或いは「突飛な素材の発見のみをもつて能事足れりとして文学としての練磨を怠つてゐるもの」これ等のものは勿論排撃されねばならぬと思つてゐる。然しそれ等の作品によつて素材主義そのものまで否定してしまうのは不合理だと思ふ。

素材は作品の内容に對して果し

お父さんの牛乳

銘酒

白牡丹
の銚子瓶

攝津酒造株式會社



うまい
安い
便利

て無関係であらうか？

リンゴはいくらこねても詩にはならぬか？これを言う前に心理主義を少しく検討して見よう。

川柳に限らず俳句と名のつくものは、俳句でも短歌でも等しく現代詩の影響下にあると言っても決して言い過ぎではないだろう。

そしてその日本の現代詩は西洋詩の模倣から発展したものであり、その詩論は又西欧近代詩論の模倣とも言うべきものである。従って川柳における心理主義の根源を知る為には、柳樹の研究ではなくして西欧の近代文芸思潮を知らねばならぬと言う事になるが、とても私はそんな学識は持たせていないし又参考書を見て書くにしても長くなりすぎる。それで其の西欧の思想を直輸入した日本の近代文学について簡単に説明しておきたい。

西欧ではキリスト教の束縛から、人間の自由性を恢復したルネッサンス以後、日本では、封建的支配を脱した明治新政府以来、人間の性の自覚、個性の解放が思想上の一大潮流となり、個個に対する誠実という動機倫理が、近代日本の最も重要な題目となった。勿論文学もこの主題に対してひたすらに忠実に奉仕したわけである。読者の為にでなく自分の為に書く事——これは近代文学に於ける創作の本道であり、表現の倫理であると言われ、自己をおいて他に何物もなく、又自己の内部を深く掘り

下げる事によって人間の性の最も深い処へ到達してこれを把握し表現しようとした。それはやがて社会よりの離脱を当然の結果として招来するのだが、ともかく彼等はそれによって自我の完成を目指したのである。

芸術家達は魂の自由を求めるあまり「社会は自我の自由の為に忌むべき処、職業は自我の完成を妨げるもの」という風に思いこんだ。かくして社会と絶縁し、外界から自己を遮断して観念の域にたてこもりひたすらに自己の深奥を掘り下げていった彼等は果してそこに彼等が最初に予期した真実の世界、美の世界を発見する事ができたであろうか。現実にはあらわれた結果から答えればノーである。

詩の作品についてのひと言えは、私達は実験心理学の無機的な集合（もつと具体的に言うなら暗喩を自由奔放に駆使した難読な詩）をもって最も新しい詩の概念として受取る様に強いられた。精神分裂症かと疑われる様な作品に理解を強制せられたりする以外の何ものでもなかった。絶望的な虚無感にさいなまれつつ飽くことなき詩人の自我の追及は遂に原初の渾沌にまで遡って行った。こうした状態のもとに本物の詩人と、それを技巧として模倣する偽物の詩人達によって、作者以外の誰にも分らぬ作品が続々とあらわれ遂には作者自身さえ理解できぬ作品が書かれるに至った。こうなると私達、庶

民は手をつかなくて見ているより仕方がない。そこで徐々に心理主義に對して不信が萌して来る。或いは次元の違う世界の人達の作品として全くの無関心になるかどちらかを選ぶようになる。

今迄述べたことが私の心理主義に對する解釈であるが、川柳の前衛派といえど其の範囲を出るものではなく、收拾のつかぬ程の混乱状態を呈していると見える自由詩とその詩論のあとを追いまわして抜き差しならぬ泥沼に沈んでゆく杞憂もあるように私には思われる。

余り文学の事も知らぬくせに大分口が過ぎたようだ。私の言わねばならぬ重大な事は、芸術至上主義の放縱に身を委ねて、自我を伸展さす為に他我（他人の自我）を圧迫したり、社会的現実に對して何等関わりをもたぬような態度が、果して芸術家なるが故に認められていい事なのであろうか。そんな時代（或る意味では古き佳き時代）はもうとつとに過ぎ去ったのではないかと言う事である。

私達の生きている世紀はもはやどの様な形ででも逃避や孤立を許すものではないと思う。芸術家なるが故にその様な特権が仮りに与えられているものであるにしても、生活から絶対に自分を切り離すことの出来ない我々一般大衆川柳人がそれを真似ようとするのは、愚かな行為であると言わねばなるまい。

然し私はこれを其の指導者達にまであてはめようとは思っていない。何故なら指導者は大衆詩人の域に止まっていけない人なのだから……。

元来人間の内部には二つの相反する傾向がある。一つは他と交わり、他と交流しながら自己を伸展して行こうとする集団的自我であり、一つは自分の内に閉じこもって自個を完成しようとする個人的自我である。然して集団的自我的生きる道は職業である。川柳が大衆の詩であるという事が本当であるならば、川柳人は集団的自我を表現するのが正しい行き方であるのではなからうか。

集団の中の自己であることを常に自覚し、その緊密な連帯性を意識する自我を、表現する為には当然素材主義が重要となることは論をまたないだろう。大衆という立場をはなれて考えても私は心理主義に對してこう思う。ひとつは外界から完全に自己を閉鎖する事ができるものか？

ひとつは素材以外に果して一步でも出られるものであろうか？素材をはなれては原初の渾沌しかないか？ではないか？

我々は必然に随つて一步一步着実に歩む以外に道はないので、その窮極に於いて我々は虚構のあとを些も止めない真の詩を発見する事ができるであらうと私は信じる。唯我独尊的な批評家から、たとえ片々たる民衆文学と言われようとも私達は生活と文学の融合をはかり、日常生活の芸術化と豊富化に努力せねばならぬと思う。それが民衆詩人としての川柳家のつとめではなからうか。

後記。純芸術論とか、純詩論とか言ういとも不可思議なものに幻惑されて、現実の生活と川柳を作る事の間に大きなギャップを感じはじめた来ている私が、それに対する反撥の気持もあって此の文章を書いた。一言ことわっておきたいのは素材主義を強調したからといって、古人の糟粕ばかりの句にしている様な類形的な素材主義まで擁護したつもりでは毛頭ない。

スタート
も心地のよい

O.S.K.
レディース

大坂商店
（94）1745-1563番

人間は曲者

大鶴喜由

一つ家に住みながら親しみにくいものに人間さまがいる。人間と言う動物は他の動植物の奉仕の上のさばって生活しているくせ者である。しかし人間にも弱さがある、吾が輩が人間の心の中に住むと人間が吾輩に似てくることは不思議なものだ。明治三十三年六月二十九日生れの私をとらえて世間の人はこう評して呉れる、向う意気の強いところは前支の猪に似ている。いやどしどしといところは後支のこつてえ牛に似ている。いや爪の上で火を灯しながら貯めた金を惜しみもなく女に使うところはやっぱり鼠の生れだと。

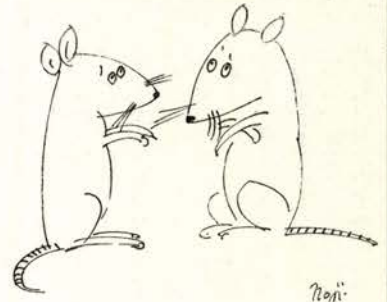
人間の性格を考えて見るのに第一に生れながらの性格、第二に環境につちかわれた性格と、第三に十二支に何時の間にか支配されている性格があると思う。さて子の年の鼠を席題にして私流の作句を実演してみたい。先ず鼠々と黙ってとなえながら頭から想の浮んで来るのを待つ、これには日頃の多読力作其他の条件もあるがなんと言っても鋭い観察と体験がこの際ものをいう。初から十七字となって飛び出してくることもあるし又既に作つ句や関連の句が浮んで困ることもある

十円のパン千円をバーで呑み

餅を引く鼠に知恵のありったけ

うららかさ鼠がカニに戯れる

青大将鼠の夢を崩しに来た
迂かつにも犬にいけどら
れた鼠
エロダニに鼠の住居程近



わが輩はねずみである

子年

蓄財心に富み、初年は苦勞が多いが、中年期より漸次開運連身の兆をもっている。自己満足な気が持たれるが所謂死金を使つて自から人格を失う人も多い。されど晩年はよろしい。
守本尊 虚空蔵菩薩 緑日 十三日
(高島易断本部・昭和三十三年卯寅曆より)

子年の生れの灸を忌む日

新十二月午の日
十一月末の日

借り猫のとらねばならぬ義理もなし

猫イラズ寄るな寄るなと親鼠

嫁が君ひと握り程恵まれ

引かれますがな鼠にと馴染み

さて粗製品が出来たこれから磨きをかけねばなるまい。階級、環境、性格等と表現がびつたり合致しているか推こうして見よう。カニ、青大将、犬は實際私が見たことだが半信半疑の人のためはぶかねばなるまい。

嫁が君は正月三日の鼠として解してくれるかしら。

かじり性

平井井平

明けて七十三歳、古ネズミの部

類である。一族郎党で二十三人半「半は目下奸癖中」大分毛色も褪せたが、干支の内に猫が居ない故か随分と飽きずに生きて来たものだ、子が十二支の頭であることにも気を良くしている。計らずも第七回目の子年を迎えて、天井裏の騒々しさも知らばこそ横になったが最後、翌朝まで死んだ真似が出来た、家内はこれを健康の証だと喜んで呉れる。食品店を営む関係で近隣から同輩が昼間堂々と来て菓子類の割片等を喰う。チヨコンと座って前足で挟んで食べる様には捨て難い愛嬌がある。掌を合せて拝む姿に何処か共通のスタイルであるのと見るのは点が甘まきにすぎないか。ともあれ、前世期の後半に生を享け、今にして月の裏側の姿にも逢い、ジェット機の客ともなり得る、一切が猫の眼ほど移り変わった、何を目的にして生命を生きて来たのか一瞬奇妙な想いに迫られるのも、今様に言うロマンティックではある。一切の運動の相対性を考える時、吾々が立止って目的が吾々に向って歩んで来るのではないと誰が知ろう。古稀を経て幾多の宗教的信仰もこの二義性に基ついているのだと決めている次第、六つかしい事は知らぬが、兎も角六十万時間余も過ごして来た事に自身誇りを感じている、下手の横好きと断じながら川柳に親しみ、生の晩秋に彩を添え得るのも亦幸福なことだと感謝している。日清日露を初め五度の戦役をくぐって、常に貧乏

とは親交が深かったが、そこは子年、喰うに不自由はなかった、高嶋易断の提言に微苦笑する所以だ、生来喰ひる事が好きで、お経、麻雀、御詠歌、将棋、歌い且つ踊る。野球、柔術、空手、大工、紙工、等々何でも御座れ皆一通りはやる。勿論大成はしない、魚、野菜の料理も亦この例にもれぬ。只一つ自慢は早朝の冷水摩擦と体操。三十四歳から今日まで約四十年文字通り一日として欠かした事はない。五十過ぎ位の体軀、健康の見本の様だと医者も言うが、永遠の生を享けたものでもない、第八回目のオラガ年には八十五歳にもなる、精々自重して思わぬことだ。

こんな風に執筆した事は曾てないが、パンを運びながら無量の

ウロコ印
武田薬品

★総合新感賞錠
二五錠 一五〇円
五五錠 三〇〇円
大阪市 武田薬品

かぜに
ベンザ

感がある、限ぎられた紙数と拙筆がうらめしい、手前味噌をお説して擲筆したい。

手前みそ葱と豆腐に助けられ
井平

川柳ねずみ

石倉旅風

一年最後の歯車が大きく回転し、百八つ目の除夜の鐘が永久の過去へと余韻を消した時に古い物への愛惜の情が切々として胸を締めつける。それもやがて新しい物への憧れと期待に繋がってはゆく、く、かくて昭和三十五年、干支の上でも殿の亥年が始まりの子年へと移り変わりました。そして私の子年生れのネズミでありました。

昔母がこの児はえとがしらの生れたからキツト出世をして呉れますよとよく言いました。然し出世の方は哀れ母の果敢ない夢となつて、凡才のネズミも流石に相済まぬ事としばしば慚愧の念を新たにしている次第であります。出世街道の方向をとり違えた本人は一向平気で至極のんびり平凡、川柳道の峻しさが愉しと川柳には切られても切れぬ肚、寧ろそれを無上の生甲斐として夜毎の苦吟に消しゴムの垢を吹き飛ばしている。傍からは今に病氣しますよと嚇してもネズミ年の生れは頑固一徹だと非難してみても利き目が無いので呆れ果てて、どうやら一時迄は放

つておいて呉れて有り難い。この根氣と健康は矢張り干支頭生れだけの事は有ると私に北叟笑みつつ、地下のお袋に対してせめてもの餞けとしてゐる歌であります。

扱てそのネズミの私と、いや人間のネズミと動物のねずみとはどの様な因果関係をもつかは知らず、私はねずみを捕る事が嫌いで仕方が無い。保健衛生上、理性と感情の矛盾、またヒューマニティの非文化的等等と聞き直られてみても同じ名のつくもの同士の諷みで、奇怪な愛情に似た感情が作用したとしても、誰が咎め得るだろう。それよりもわが輩のネズミはこれから天井裏で氣勢を上げるねずみ共の動静に耳を傾ける、彼等は彼等特有の鋭敏な全身の臭覚で現代人間共の政治感覚と手腕を嗅い、まだまだ人間共との好ましい同居生活は安じて続けられるものと結論し、その上十二年振りに巡り来た子年の新春に掌を返えして、ねずみ族を讃えるマスコミの無節操をも痛罵しているものようである。何しろ干支頭の誇りをもつ彼等の事として、あの冷たい四つの足を叩きつけては踊り、囃り且つチュウチュウ愛を囁く。全くわが世の春を謳歌するの図である。さらば下のネズミもこの辺でちびつた鉛筆を持ちかえていともおめで度い今年の夢を、不朽洞カッ重たく持つて覚め、そして夢であつても手にもつた重量感を実感へと近づける刺戟剤として、川柳研鑽の芯を削る事にする。神酒稍過ぎ

えと頭

野本香水

「わが輩はネズミである」の弁危つかしい処で終止符をうちましよう。

時々はいくらもするが、気の小さい愛らしい動物「ネズミ」これが同族の呼び名である。一体何でもこゝろ呼ばれるようになったのか、人間の考える事は不可解な点が多い。先賢の説では「ネズミ」とは寝たから来たそう。人間様の生活を乱して申し訳ないとして、自足の時間以外は静かに過ごしているつもりだがそうそう寝て暮す程のん気な身分ではない。干支頭にしてくれたのは得意だが、子の方向は北であり、子の刻は真夜中のこと、どうもネズミ格を尊重したとは思えない。僕は二重性格をもった恐しいネズミかも知れない、或る秋の昼下り、遠緑のドブ太等に誘われ、食料事情の偵察に出た時、野良猫と出くわした、猫君チャッと眼を向けたが、かかつて来る気配はない。僕達勿論吃驚したが此方は多勢日頃の憤恨が爆発、宿敵に挑みかかり格闘の末遂に引揃え、手近の縄で縛り上げ重りをつけて小川へザンブと投げ込んだ、その上小石の雨をあげせ意気昇天、窮鼠猫をかむ位の騒でない、その夜母に散々叱られ又猫の執念について聞かされ内心不安であつたが化けて

出なかつた事を思うと同族の恨を一身に引受けた善良な猫君の最期であつたかも知れない。

人間社会で「産めよ増やせよ」と喧伝されては、結婚した僕達には、日本に生を享けてる以上人間に負けては名折れと努力したが、ネズミ算式には増えなかつた、生れても育たない、その理由が先頃やつと判つた。仲間をそむいて生意気にも馬と結婚していたからである。それでも可愛い姫が一匹、甘えながら、わが世の春を楽しんでいる。僕の別名おふくさん、大黒さんのお使いと親んでくれるね、僕がお宅の一隅を拝借している間は、お宅の繁栄疑なしです。天井裏も大分冷えこんで来た、こちらへも、お居寐を振舞ってもらいたいのが僕の本心である。

女ねずみ

酒田清子

吾輩に言わせれば人間程勝手な動物はない、十二支の干支頭に置いて置きながら極度に吾輩等を嫌うからである。そんなにいやなものなら十二支からのぞいて猫か鼯にでもすればよさそうなものである。吾輩等を追払う為に各家庭では猫を飼いたがるが果して猫なるものが衛生動物であらうか。下駄や靴を履く猫は一匹もいない、雨の日でも泥足でしゃあーしゃあーと座敷は当然のこと寝床の中ま

で平気で入り込んでゐるのを見ると全くあきれてものも言えない。三度の食事にもことを欠かない、それに比べる吾輩等の存在は実にみじめである、ベッドを作るにも並々ならぬ苦勞がある、音を立たれば家内中がうるさい、幸いなことにこの家では猫を飼っていないそのかわり、吾輩を牽制するつもりか猫の泣声を真似るのには顔負けする。しばらく静かにして聞いてやることにすると、各自自慢のしあいである、鼠が間違う位だから物真似コンクールに出ようか等と自惚にも程がある、人間って実に他愛ない動物である。衣類を噛み道具類を噛んでやることか弱い吾々が人間に對するせめてもの反抗である。つくづく矛盾だらけの地球上がいやになつ

み

んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック



積水化学
本社 大阪市北区宇道町1

絵と川柳で表現する歴史

戸田古方

はじめに

昭和十七年以来十七年の教師生活の間、片時も忘れずに考えて来たことは、どうもれば一人でも多くの人に私のする話を理解してもらえぬかということでした。経済を学び、歴史を勉強したというだけで、人を教える教育は全く受けてきていませんので、すべては創意と工夫から出発しなければなりません。句は、解説を助け、その

した。私の身についたものを充分に生かしてやるより外はなかつたのでした。それが、川柳、シナリオ、挿画の三要素を活用することでした。只今から見えていただく繪本「歴史」はその成果の一つでありまして、映画「歴史」のためのプロットだとも思っております。

川柳で描き出さんとするものの要点をみつければ、映画を組立てる時の心がまえでそのうちから差びました。この中でつかわれてい



直立猿人

背景に樹立があつて、猿らしいものが四足おります。植物と動物が単細胞の生物から生れ、わかれ

て来たという進化論の教える生物その動物の大枝の先きに人がお

り、猿がおります。猿と人とは同祖といわれておりますが、その同祖がきつねざるです。シルエットの四足の猿は下から上へ進化の順にしたがってかきました。四つんばいから直立するまでの姿に目を

た、月の世界へ集団移住出来ないものか、目下吾々はよるとさわるこの話でもちきりである。

清貧ねずみ

藤井五茶

「猫に小判」とはよく聞く言葉であるが、「ネズミに小判」とは言わない。どうしてであらうか、案外ネズミは利殖の道にたけていて、ネズミ算式に金を増やして世の富を独占してしまうのではないかと昔の人は思ったのかもしれない。

然し同じネズミ族でも私などのように安サラーでビイビイ言っている者には、世捨人のように清貧だなどとはしま込んでいるわけにまいらない。まして清貧だなんてゼニ儲けのコツを知らない、甲斐性なし野郎のまけおしみじやないかと、言われかねない御時世、所謂ドライの時代である。

明けても暮れても製図板にカジリついて線ばかり引いてオマンマの種にしている私などには、金の出来るはずがない。かと言つてあいつはケチだなんて友達には言われたくないむつかしいものである。

その点西欧人、特にフランス人は日本人からみればすぐくケチに見えるそうである。結局本当の金の使い方、すなわち合理的な考え方で金銭を使うからであらう。日本人のように隣近所を気にし

謹賀新春

岩崎愛二

芦屋市呉川町六番地
電話 芦屋 4603番

たり、ミエをはったりすることがないのであらう。

教育勸諭の洗礼を受けて育った、私ら戦中派を含めて年配の人達に、その器用に割切ってしまうことは出来ない。

何事も金々と割切ってしまうのも悲しいことであるが、実際問題として金なしでは何も出来ない世の中でもある。

久しぶり逢えば貯ったかときかれ

金ボタンねずみ

高津徹也

吾が輩はねずみである。今の所、この家の主の目を盗んで台所へ食料物資を失敬するまでには到

とめて下さい。

直立の結果、手が足から独立し、その手で道具をつかい、頭のかたちもかわって、自由な発音ができるようになり、ことが生れ、話し合いながら生活を高め、そして一番しまいに、火が人間によって自由に作られるようになります。いよいよ文明の誕生です。

○ 爬虫類先祖のこともいいたい日
尾龙骨一寸さわってみたくなり
火の神を産んで女神はみまかりぬ

◎ 文明の誕生

衣食住といっても喰べることが第一だったでしょう。

四人の人はその喰べることにために一生懸命になっています。矢印の順に拾う生活(採取)、獲る生活(狩や漁)、養う生活(牧畜)、培う生活(農業)へとすすまれます。それは獲物を手に入れる

ことがだんだんむづかしくなったからです。人間の努力と知恵のすすみ具合を考えさせます。



光熱水土
がととのうところで
四大文明が
BC4000~1500 ごろから

文明がはじまったのは地図の上
にあらわしたエジプト、メソポタ
ミア、インド、中国の各地です
かたつむり笑うな俺は遊
牧者
あの星がみえると種をま
きはじめ
黄土礼賛黄色は王の色と
きめ

文明がはじまったのは地図の上
にあらわしたエジプト、メソポタ
ミア、インド、中国の各地です
かたつむり笑うな俺は遊
牧者
あの星がみえると種をま
きはじめ
黄土礼賛黄色は王の色と
きめ

らないすねかじりのチュー1公である。それが証に吾が身にまとう服装を見給え。生後二十三年を経た今も恥ずかしくも、五つの金ボタンが、胸のはだけん様に等間隔に配置された制服の着用を余儀なくされとる。更に吾が輩は聖徳太子とやらがすりこぎをおし頂いている写真入りの紙切れ、吾が輩はこれに目がない。山羊は紙を食うそうだが吾が輩は勿体なくもこれをかみ砕いて胃に落とす馬鹿はせん。

★ 私設郵便局から

年末年始の遅配を見込み、本社新春句会の案内ハガキは今月限り郵送いたしますが、各支部及び関係方面には句会案内のピラを一括発送いたしますから、幹事の方から直接みな様にお渡しねがいとうございます。なお連絡のつかない方は、本誌表紙の二をご熟覧ねがってふるって会場である大阪観光ホテルへ一人でも多くご出席くださいませ。

(川雑句会部)

謹賀新春

土井文蝶
川村好郎
西いわを

大阪府泉北郡高石町北四六五

大阪市東住吉区桑津町七ノ二二



この写真、ボタのグツサクだけでパパとママにないしよで貸したげるとは中島孝之（三男）タンの弁である。

川柳夫婦善哉

訪問者

丸尾潮花

をフト思い出さされた。御夫妻は、川柳は申上げるに及ばず、小唄、絵画、舞踊、最近は書道と、趣味としての範囲もお広くそれだけに話題も豊富であり面白く

内的一句が天だったのだ。たしか死にますともヒス第一巻の終りなり

だったと思う。それから皆がね。生々庵の奥さんはヒステリーだろうと言う噂が出てね、弱ったよ。その言い訳をこの機会に是非君にして貰いたいと思う」と笑いな

ら茶を飲まれる。「ヒステリーではないと言うことをです。ね。」とお問ひするのへ、奥様は声をたてて笑いながら「いいんですよ。皆さんよくござります。主人は至極陽気なんです。主人とは性格的に言いますと、潮花さんとの様にね、逆なんです。心配性とも言うのか、とても主人の方が性格が細くて弱いんですよ。旅行をするにしましても一人旅などは絶対に出来ませんし、自分で財布をあけて買物をする事も駄目なんです。ですから、しよっちゃん私がそばに付きつ切りと言うことになるでしょう。原稿や挨拶を頼まれます。すべてに不意なことはしたくないと言う性格なんです

ね。診察以外の一切のことは私がしなければならぬので、阿茶さんなどを羨しいと思う時がいくらもありです。男みな阿呆に見えてでなく生活さえ出来たら余程一人でいる方がいいと思います」と明るい笑いのなかにお睦しいところを見せて下さる。「だから診療所を建てるにしてもね。こんな場所で行くかどうか。資金面に於いて人様に迷惑をお掛けしないかなどと先に結果を考えてしまふんだね。そこへ行くくと小石なんぞは、何とかかなりますやろの方なんだ」と奥様の証言をなさる。奥様がよく申されるように子供っぽいところの有る先生により親しみを味わさせる。「先生の作品のなかに奥様を作句されたかどうかは、わかりませんが、たとえば

同いを立てると妻の眼がけわし

呼び鈴を押し押し妻の眼を案じ

沈黙と云う手で妻のヒスに耐え

生返事勝負な妻が綱を立て

などのように句だけを見ていますと、とても奥さんが厳しいように思われる方があるのではないかと考えますが、事実はヒスの句の如くそうではないと言うことなんです。」「どうしても僕が作るとうした句になるんだ。だから家の女中達も最初よくわからない内は養子さんかと思つてたなどと言うんだ。それだけ僕は女性的だよ。その点小石はM過剰と言うと

(一) 生々庵と小石

おしどり川柳家の訪問をするこ
とになり大阪の南の街が美しい五
彩のネオンに夜の化粧をされるこ
ろ

元旦だこの伴を妻と酌み

の作家、川柳副主幹、医学博士と
しての中島生々庵先生と、前川維
婦人友の会理事長、中島小石さん

御夫妻を三休橋の診療院にお訪ね
した。まだ白い診察着のままのお
忙しい先生御夫妻は心よく迎えて

下さった。

曾て、女流作家訪問記で小石さ
んをお訪ねした日は丁度小唄のお
稽古日であり、三筋の糸の音が艶

っぽくこの部屋に流れて来たこと

話して下さる。奥様が作句を本格的になさるようになられたのは南区の医師会杏林川柳会が出来てからであり、それ迄は専ら批評家の方に廻られ先生の川柳に対してのよき協力者で居られた様である。この奥様にして先生をしのがれる秀句のあることも私達は見逃してはいけない。

「路郎先生が松坂クラブに川柳講座をもつていられた頃の何か面白いお話がありましたらお伺いしたいのですが。」

たしか昭和十三年の七月十七日の会だった。大阪の地下鉄が天王寺迄開通をした日だった。ヒステリーと言う課題で作句した時、僕の句が十句も入選をしてね。その

川柳雑誌社
婦人友の会

います ござい とうと めで おし けて しま 明

麻生 霞 乃 山 川 阿 茶 中 島 小 石 中 島 晴 武 部 若 菜 太 田 良 子 高 橋 操 子 藤 村 梨 花 西 出 一 栄 酒 田 清 子 和 田 登 志 子 藤 村 〆 女 内 藤 き 子 竹 内 花 代 子 小 西 富士 子 八 木 徳 子 市 場 カ 子 吉 川 悦 子 沢 田 美 喜 子 杉 本 知 恵 子 西 村 梨 里 子 外 一 同

川柳婦人友の会連絡事務所
大阪市南区二ツ井戸町二三

山 川 阿 茶

ころだね。

倅せは女房少々ぬけている
と言う句で埋め合して置こう」と
うまく逃げられるのも流石であ
る。

「浜寺支部の句会で先生の選で
奥さんが天位に入賞されて、優勝
カップを見事手に入れたと聞
いていますが」「それだよ。あは
らしくてね。何の題だったかな」と
と考へ込まれるのへ奥様が「拍手
だったと思いますが」と助言され
る。「そうだと拍手と言う題だっ
た。類句が多くてね。一句一句何
とか彼とか文句を言てね。最後
に僕の軸吟まで没にしてさ。ほめ
て抜いた句が小石の句だったの
でね。どんな句だったかな」と思
い出せないご様子に奥様から、
頼まれて拍手しているあほ
らしさ

ですがな。「そうだ。こつちの方
があらうてな」とご夫妻が声
を揃えて笑ってしまわれる。「い
つでしたか編集部の主催で万代池
に夜桜の会を持ったことがありま
したが、あの時も奥さんの

ものたりぬ顔花だけを見て
帰り

の句でしたか最高点になりました
が」「わたしなどはバツバツバツ
と作句しているだけですが、そこ
へ行きますと生々庵などは自分で
考へ過ぎるようです。わたしなん
か全没になつても恥しいこともな
いでしょう。けれど生々庵などは
そうもゆかないためでしょう。」「
僕はだから席題と言うのは嫌い

だ。余程コンディションがよくな
い限り小石のようには行かない」

「作句なさいなとお互にお見せ
になつて批評なんかをなさるん
で」「全然どころも見せません」
と奥さんがハッキリ言われると
「だから浜寺支部の時のようなこ
とになるんだよ。字も男のような
のを書くだろう。だから少しもわ
からないんだ」「よく主人のなさ
る選には奥様は投句されない方が
ありますね。花代子などもよく出
ししるんですが、堂々と出せば
いいと思います」「そうだとせ
いいんだよ。僕は五年前から元旦
に屠蘇をお祝いすると一本ずつ軸
を書くことにしているんだが、今
年で五本溜っている。これは子供
達に残してやりたいと思つてね」
一幅ずつ掛けて見せて下さる軸に
は奥様が画筆を添えていられるこ

とがはは笑ましい。

初孫の産声うれし屠蘇の味
の句には美しいデンデン太鼓の絵
が添えてある。

うらうらうら還暦という年
の朝

これは先生の還暦の元旦に書か
れたものであり、句には犬張子の
絵が添えられていて奥様から主人
は大年なものですからと説明を加
えて下さる。(生々庵先生は明治
31年7月2日生れ、小石奥様は明
治四十年3月10日生れ)これこそ
全くの夫唱婦随であり他柳社にも
見ることの出来ない羨ましいもの
を胸深く植付けられた。君の此の
訪問記を機会に是非一家で川柳を
作つて頂くようにしたいと思う。
句の上手とか下手と言うことは問
題外にしてお互に興味の同化と言
うものに依つて助け合い協力をし

合つて貰いたいと思う。夫婦と言
うものは歳をとるとお互の欠点と
言うものがよくわかつて来る。そ
してもう一歩進んで来ると競走的
な意識が出て来る。しかし夫婦と
言うものはお互が競走をし合う一
対でなく協力をし合う一対であつ
て欲しいと、山川教授の言葉を一
用されて、こうした意味に於いて
も柳歴の古い方達はお互の配偶者
を同じ趣味の道に誘ひ共に句の会
場に出て来て頂きたいと思う、と
言葉をつなげる。「ただ見るだけ
でなく、自分も作つて見るとより
批評眼が深くなつて来ますし、句
の持つ良さと言うこともわかつて
来られるでしょう」と小石さんも
先生に同調なさる。

が、それでいて子供達も結構喜ん
でいてくれると思います」と趣味
の同化を心から楽しませているよ
うである。ご夫妻と向ひ合つて話
していると豊富な話題はなかなか
に尽きそうもないが、お忙しい時
間を割いていただいたことを思
い、ご夫妻のご多幸を祈つてお別
れした。

川維 婦人友の会新春句会 会場變更!

1月24日午後一時から開催さ
れる友の会の会場を左記の所
に変更いたします。

市電三休橋下車南詰
中島小児科診療院

(電話)三九八四番
兼題・会費等前号参照。

金 泥 集

課題「ねずみ」

選 乃 菫 生 麻

株式にして白鼠首にする	阿茶	新妻の悲鳴小ねずみ走り出し	同	ねずみちよろちよろお前も共に年越すか	同
どんくさい鼠お鍋と共に落ち	同	ねの年の始でねずみくさされず	一栄	ねずみ年だからねずみの絵とさとり	たつよ
辛気くさい猫と鼠の持久戦	同	餅ひかれても今年しやほつとこねずみ年	同	ねずみ捕り仕掛け小声になる茶の間	知恵
嫁が君などと呼べないど鼠	同	子沢山ねずみに負けぬ荒しよう	白美	危機迫ると知らずや鼠人をなめ	若菜
ひきだしの隅上不運なねずみの子	きさ子	留守番へねずみに引かれぬようにしや	同	相性がよいのでねずみの方もらい	良子
密輸船で海を渡つて来たねずみ	同	ちり紙の中で平和なねずみの子	美代	節穴を足場に鼠夜をかせぎ	美音子
絵ガルトのねずみは餅へすわられ	同	悄然と川を流れるねずみの子	同	転宅の荷物とねずみ先に行き	周甫
繁昌の兆のねずみよくあばれ	奈良子	天井のねずみへ猫の声をまね	花代子	木賃宿ねずみ走つて寝つかれず	陽子
三度目はもうさとられた鼠取り	同	うっかりと忘れねずみにしやられ	同	天井のねずみに猫のあわてよう	徳子
千円を預け夢みるねずみ算	しの女	人間の智慧をねずみが嘲笑う	万女	鼠一匹五十人の娘が騒ぎ	俊江
病める日の天井の鼠羨まし	同	大掃除ねずみの不運は棄を見られ	同		
寒空へ二十日ねずみの輪がまわり	小石	ねずみとりせせら笑つて餌を取り	都詩子		

次回題「チュウインガム」〆切一月末日

いのちある

句の一解釈

— 古川柳をかえりみて —



林 夢 虹

初めに私は、古川柳のことを考へるに當つて、個々の作品について考へたのでなく、一般的な古川柳と言ふものを考へて見た。古川柳の中には立派に現代の川柳と肩を並べて鑑賞にたえうる作品もみられるが、それはほんの少数に過ぎず大部分の川柳は古川柳として、江戸時代の風俗考証としてしか鑑賞されていない様に思われる。江戸時代の文学として當時、和歌・俳句その他の文学に伍して隆盛をきわめていた川柳が古川柳の名のもとに現代人の共感を得られない原因はどこにあるのだろうか。この問題は現代の川柳が将来昭和の古川柳と言われない為に重要なことだと思われるので追求して見た。

路郎先生は「いのちある句を創れ」と教えられている。この「いのち」には二つの意味があるのではないかと考へる。一つは永遠の命、一つは限りある命。勝れた文学とか絵画彫刻などはその作品が消滅しない限り永遠の命を持つてあろうし、またバイオリンの名手によって奏でられた名曲は、瞬間に消え去つてゆくが命あるものと

言える。川柳にもこの様に二つの命があると思う。古川柳には永遠に命ある句が少なかった。何故であらうか。それを考へて見る前に、芸術的に永遠に命あるものとは何かを考へる必要がある。この問題は各人それぞれに意見を持つて居られるだらうが、私は次の様に考へる。

一、作品に思想がなければならぬ。ここで言う思想これは大げさなものではない。一人の人間の人生観、自然観、「物」に対して何を考へ、何を感ぜたか、と言う程度のものである。そして、思想は、思惟は、たとえそれが、その人一人だけのものであらうとも充分存在する価値はあると思う。

一、真実の人間を表現し得た時に作品は永遠の命を持つ。人間が人間であること、これは如何なる社会の変革が行われ様とも不変であるから、その人間を全く表現出来れば、その作品は永遠の命を持つ。ここで言う人間とは既成の社会秩序により形作られたものでなく、人間の内部に形作られた人間である。

与える。すべての作品は勝れた表現力を必要とするが、もし思想や概念や感情を、それに適切な言葉とリズムで表わすことが出来れば、永遠の命を持つのではないかと考へる。然しながら、すべての作品が勝れた表現力の名のもとに永遠の命を持たないことは、古川柳の多くが如実に物語っていることである。時の流れとともにその輝きを失つて行く句を検討して見れば、如何に句のテーマの意義の大なるかが解るのである。

私はここで少しく古川柳に目を向けて見る必要を感じる。古川柳の「いのち」の衰退が、我々に少なからず暗示するものを持つからである。

一、思想のなかつた古川柳。川柳作家のレベルの低さ。

古川柳の大部分の作品の作者である庶民も、素朴ながらも人生哲学を持つていた筈である。ところがそれらは殆んど作品に表現されなくなつて浅い諷刺滑稽に流れてしまつていく。諷刺滑稽とて、ものの本質をうがつておれば一つの立派な思想である。古川柳の中にも少数であるが立派な作品が見られる事は言うまでもないが、川柳の募集方法や、賞品授与の制度などの欠陥から、川柳が競技化してしまひ、為に内容が低俗になり智識人の軽蔑を買つたのである。それがばまれてしまったのである。その他、選者や社会型態にもその原因が見られることと思う。

一、人事を詠みながら人間が表現出来ていない古川柳。

江戸時代の庶民達の人間観はどの様なものであつたらうか。この時代の庶民達の人間観は外部から形作られたものであつて内部から形成されたものではなかつた。この事實は墨絵・浮世絵や、他の文学芸術によつても知ることが出来るのである。この様に既成秩序による人間観で作られた古川柳に出てくる人間像は、社会の中の家、家の中の一員としての人間が詠まれたに過ぎない。主として社会の人間の横のつながりが表現されたのみなので時代の推移と共に社会の型態が変れば、その人間観も変り、果して作品の実存感が、うすれて来たのである。外部からの既成秩序により形作られた人間観でなく、内面意識により形作られた人間観は社会の変化に拘らず人間が人間である限り不変と考えられるから個性意識による人間観で作られた作品は、永遠の命を持つと考へる。古川柳の中にも人間の愛情を詠んだ句に今なお人の心を打つ句が多いのは、愛こそは何の時代の時代にも人間の奥なるものの呼びかけであるからであらう。

情景描寫に終つた古川柳

鋭い批判性を持つ古川柳も人間の批判までゆかず情景描写と些少な皮肉とで終つていく。そして作者が自己の意識の深層に立ち入らず、常に第三者の立場から物事を見た為に対象を客観的に捕えることには成功したがその人間の

謹 賀 新 春

笠岡市山口

木 山 遠 二

西 川 晃

大阪府西成区東入舟町二番地

川柳雜誌社

にしなり支部

土 井 文 蝶

吾 郷 玲 人

本 多 柳 志

魚 住 満 潮

石 倉 旅 風

岸 川 漣

欄 清 蘭

本 多 保 美

中 田 五 色

中 川 利 男

加 川 靖 真

宮 原 敏 子

岡 田 歌 子

西 川 晃 志

後 藤 梅 志

大阪府西成区玉出新町通の一

とらえ方に於いて、人間心理の追求に於いて、極く表面的に終ってしまつた。又古川柳にはもう一つ大きな弱点があった。それは古川柳の作品の背後に作者が居ないことである。古川柳の多くは、その句を読んで作者が感じられないのである。単に人事を皮相的に詠んだ為に作者の思想も見られず、人間を深く掘り下げて見ることをしなかつた為に作者と作品との間の思想の交流も見られず従つて作品を読む鑑賞者の我々との間には無論思想の伝達がおこなわれないのである。古川柳は人の心理を鋭くついている様であるけれども、それらの多くは人と人との関係においての心理であつて、そこに作者の思想が見られない。人間の間の心理を詠むのも勿論立派な川柳であるには違いない。又作品は作者と独立して存在するものであろうけれども、文学作品にとどまらず芸術と言われれるものは作者と鑑賞者との間に作品を通じた思想や思维の交流が行なわれてこそ、その作品の生み出された価値があるのではなからうか。

以上が私の「いのちある句」についてのとりのめのない解釈なのであるが、終りに社会をとらえる視点を自己対社会におき変えてこそ永遠の命を持った社会性のある川柳が生れるのではないかと思ふ。

句評のこと

酒井ひか平

川維に句評がほしい、以前から読者の声としてとり上げられて居る切なる希望ではあるが、こと句評に関する限り低調である。

かつて、豆秋論を拝読させて頂いたが、それに続くものが無いのが淋しい。又、他方面よりの言論の不足は、諸家の闘志の不足とは言ひ切れぬ迄も、事なかれを願う消極性を指摘されても致し方あるまい。

一個の作家に言及するもよからう。又、不朽作家群、近作柳柳群をとり上げて見るのもよろしい。何れにしても、盛り上がる闘志の表現こそ川維をより向上させる一つの手ではなからうかと思うのである。

手相体験談

杉本 一鶴

昔から手相は当るも八卦当らぬも八卦とよく言われて居ります。長い闘病生活のつれづれに自分の手相に変化あるのを知り手相研究の本を参考に時々手の平を見て居ります不思議と思ひ当る節が度々ありますので私の悲しい経験を御紹介しましょう。

手相には生命線・智能線・感情線と三大線を初め、運命線・太陽線・障害線・財運線・健康線・火星線・影響線・直感線・手首線・結婚線・希望線・金星帯と様々な線があり記号手の型と性格・指と爪・手の組織・丘と人それぞれによって異なり流年法でその時機を

知る事が出来ます。

私が先ず一番初めに心にかけたのはやはり生命線の事で、あざやかに長く刻まれて居る生命線であり乍ら大小四個所程障害線によって横切られて居る事です。障害線とは損害・失敗・失脚・破綻・離別・災害などの不運な出来事を示し障害線の位置はその不運な出来事の時機を予告します。

私の第一第二の障害線は発病再発を暗示しており第三の大きな障害線は三年前に父を亡くした事を示しております。

この障害線の場合は未だ父が生きて居る一年程前から気が付き度々母に父には充分気を付けるよう

酒

清



灘・魚崎

大塚合名会社醸

申し伝え父にも深酒をせぬよう身体を大切にしてくれと言っておきましたが聞き入れられず私が想像していた時機に父が他界しました。悲しいのです。

次の障害線はそれから三年ぐらいの下にありもう一度大きな変化

が私の身の上にある事を覚悟はしておりましたがお互に病気が治つたら夫婦になろうと強く誓っていた最愛の人を亡くするとは自分の慾目かは存じませんが考えてもおりませんでした。

しかし現実には手相をあざやかにこの悲しい運命も暗示していたのです。

それは影響線と言つて生命線の内部に添つて細い線があるのでがこの線を愛人を示す線とも言います。

その影響線が生命線と共々障害線に横切られ又拇指の付根の中央部から生命線へ向つて走る一本のきわめて太い線が最愛の人を失なつて精神的に大打撃を受けた後候がはつきり出ています。

感情線も心なしに前よりも大きく切斷され感情線の支線の先が下向きになつて食指の下で智能線に接して居るのも悲恋離別を示しております。

このように悲しい現実二度度で直面しますと満更手相も馬鹿に出来ないものがあります。

それでは来月に控えて居る三度目の手術は果して命に別条はないか、これは甚だむずかしい事です。

今迄の二回の手術も九死に一生を得て来たのは火星線と言われる生命線の欠陥を補強する強い線があざやかに現われて居るので無事に乗り切れるものと信じておりますが、何分にも無理を承知で手術台へのはつて居るのですから奇蹟ある事を信じて居ます。

おめでとう

進之助

下山 清 潮

大阪府茨木市大字郡 八三六

林 野 魁 光

吳市吉浦中町二丁目

八木摩太郎

八木徳子

堺市九間町東一丁山之口筋 電話堺②七二三五番

明和病院

川柳雜誌社支部

指導 西尾 栗

支部長 西尾 栗

橋高薫風子 徳永 鬼美

河相すゝむ 野呂 鶴汀

樋口 舟遊 酒井 丹福

塚田 東雲 本城 菫月

吉本 善風 小浜 牧人

菱田 満秋 富永 夢路

木田 留三 太谷 策平

門永 三舟 樋口 寿栄

御園生 すみれ 村上 三上 美路

池田 球絵 安田 義子

山岡 文女 島本 泰

事務所 西宮市上鳴尾町一三〇

電話西宮④一七六七代

明和病院内

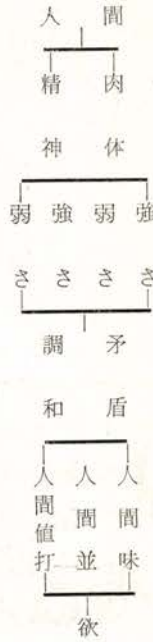
明和川柳研究会一同



入門講座

研究題「人間」

戸田古方



つい仕事のくせが出てこんな表をかいてしまいましたが、「人間」という課題はどこをどうねらうか。「人間」とはどんなものか。むづかしいえば哲学、それから心理学、生物学によって説明しようとしているのが、いまの人間であります。「人間」をまず動かない純粋な静止の状態でながめてみたいのですが、丁度、偶然の機会です、先日人体解剖を見学が出来ましたので、そこから入ってまいりましょう。

人間の弱き小さな刺に知る

静水

刺どころか、よく砥がれた金鋼のメスやハサミでいと軽々と切開かれて行きます。人間という機械

が全く静止の姿で目の前に分解されて行くのです。操業をしている休日工場のような静けさです人間のよろさ励ます手術台

手術台には生の希望があります、もうここには励ますすべも残されてはおりません。もういといえはこんなにもろい人間の姿は他では見られますまい。しかし、どこまでいっても柔軟とみえるはらわたにも何かしらしぶとい強さが感じられないわけでもなく、思わず自分の胸や腹に手をおいてみるのでした。

十代の人間やはりバネがあり死体は事故死の二十前後の若い

女性でしたが、内臓のすみずみまで弾力がみちわたっているのです。年配の人なら、植木屋さんの使かう芝刈ハサミのような道具のいる肋ら骨がメスだけではずれて行きます。このような力が人間という機械を大切にすれば百年近くも動かしつづけられるのです。

しかし、なかをすっかり取り出したあとの空洞に、びっくりするほど大きな背骨が、弓なりに雄大なカーブで曲りくねっているのを見ると、これではまいかと、何か、寒々とした感じがしました。

人間の行末見たり骨袋

隣の控室にちらりと仏壇を見ますと、物のように見ていたのがすまないように思われるのでした。大だつて、兎だつて、又、小さな蛙だつて同じ生物なのに、やはり人間の謎はそう簡単に解けそうにもありませんでした。

戦争中、外へ出ているとき、空襲にあいますと、こんなところでたれ死したくないとよく思いました。犬や猫もそんなことを思うかしら。

人間はど強い生物はないでしょう。

人間の野望は月に命名し

保夫

その強さは弱さから生れたものでした。弱いからこそ集団生活をはじめた人間、力は象に、走れば小さいネズミに、泳げば魚に及ば

ない人間、そして飛ぶことは全くできなかった人間は苦しみの中に生きつづけるみちを見つけ出して、今日の、ほかのどんな生物もついてこれられない高さにまで文明を押し上げて来ました。

海の怒濤見てたら人間小さすぎ

一鶴

簗笥屋の人間隅で縮こまり

和楽

大きな目安人間写つとり

村諷子

佐久間ダムの画面に人間を入れた。おくのを私も忘れませんでした。ダムも簗笥も人間のこしらえたもの、しかし、どれよりも大きいのは自然です。海を犯した人間は海に仕返しをされるとアサツンサーのことはを深刻にきいたものでした。

この自然の仕組の一つとしての人間の構造の实物が、いま、眼のまえにならんでいるのです。

人間の見た眼に人間穢なが

岸南柳

大阪市阿倍野区天王寺町北一ノ八 男まえ製造所

て来ました。

人間の臭を捨てて温泉に出掛け

真奇

たとえバラの唇をもつていようとも、流れる曲線につつまれていようとも、温泉のなかへも、そのままちこんでいるお互の臭です。

勿論高志さんの句も、真奇さんの句も、こんな物体だけを詠まれたのではなく、心の醜いものがあるから醜い心もおこるのです。からだから発するもろもろの悪臭はもろもろの悪心とつながっているのです。

コクヨ 便箋

死体のあしゆび、親ゆびの次のゆび、手でいったら人差指にあたるのが親ゆびより長いのです。愚にもつかないことかも知れませんが、そのゆびが親ゆびより長いと親より出世するとこどもの時からきいていました。

この女性が親より出世しているだろうか。いまは問うべきでなくてもありませんが、下積の庶民としか見えないからだつき、顔つき、そして、この若さで不幸な死に方をしたこの女性が親より出世しているとは、一寸とまどいししました。もっとも出世の意味をどうとるかです。

この解剖見学が生物学的以上のものをあたえてくれそうです。出世を私なりに解釈してよいものなら、幸せとおきかえてみましよう。

長生きすれば恥多しということもありますので、たとえ若死でもすばらしい、満足すべき恋を味わっていたかも知れません。思いなしか、表情は苦しみにひんまがっていませんでした。

人の世の幸も不幸も船にのせ

喜怒哀憎人間相互の渦に生

き 句念坊
全ての終ったところから時計の針を逆にもどしてゆきます。

人間の値打花輪の数できめ

愛鳩
勿論、そんなおもてつ面できめ

られるものではありません。

人間に生まれて苦勞つきまとい 万女

「子供と大人とどっちがいい」ときかれ、それは子供だといいきりました。無邪気といいますが、子供は少ししか苦しみを知りません。この女性の若さではあぐれる悩みはあっても、底知れぬ凍りついたような、深い淋しさは知らないでしょう。

人間の世渡り鬼は居ずとき たつよめ

おひげそりには
安全で
経済的な……



フェーバー 剃刀

人間の性は善、かつては鬼とみたのが、鬼ではなかったと見えて来たのであります。ひとを鬼と見るのは自らのなかに鬼があったからであります。ひとが鬼と見えなくなる時には自らの鬼も消

えているのではないのでしょうか。

人間嫌いのほんとは愛の深い人 参無子

ひとが鬼とみえたり、嫌いになったりするのは仏になる一歩でもあるのです。愛は惜しみなくうばい、にくしみは道に愛に通ずるといえます。

とりはずして、背骨より見えなくなったとき「これでしまいか」と思わせる、人間は、また神に通じる人間でありました。

万物の霊長万物の性をもち

正にそのものズバリ、深いものにふれています。 堅持

お粗末な人間などと人のこと 豊年

さきの鬼の如く、こういう見方のなかに救いが近づいてきます。ものいわざれば肚のふくるるわざ、ここに川柳建立の第一歩があるのです。

人間がある日獣のようになり 周甫

家裁まで来て人間をさらけ出し 南天

人間のハダカ抱き合うコッブ酒 八九寸とか

銭湯で人間素直に流し合い 敏子

とか成長してゆくのであります。

みなさんの句をおかりして、私のいいことをよくいわせていただきます。

長い間御愛読を賜りました古方の第二教室、改題して只今の入門講座、都合によりまして次回よりバトン清水白柳氏にわたすことになりました。はるかに長い柳歴と、多年俊才を育成されてきた豊かな御経験で必ず皆様、御満足をえられることと信じます。

さよならをいわないで
おわかれしましょう
またあう日まで

古方の窓で 川維の窓で
(三四、一一、二二)

○

研究題「プラン」
切 一月十五日
発表 三月号予定

宛先 大阪市天王寺区上之
宮町一六

清水白柳宛

謹賀新年

謹賀新春
南区医師会文化部
杏林川柳会

岩石南
岩崎一伸
富永路文
河村瑞川
吉田壽彦
吉田都羊
中島生々庵
中島小石
牟田一哲
安岡珊枝郎
山川阿茶
平尾太希志

中島生々庵
中島小石

大阪市南区鰻谷
仲之町二〇番地



自惚れ

丸尾潮花選

自惚れへ女將は舌でよく儲け
内幕を知らず自惚れ笑われる
孝風
ようもまあ私が惚れたなど言
正直なカメヲ自惚れしゆんとなり
真奇
自惚れの芸が師匠へ口答え
一鶴
自惚れなさんなど女房氣にかけず
南天
自惚れを見抜いてはめて妓酌ぎ
尚史
自惚れへおだてておいて飲んで去に
東天紅
自惚れは裸にされてからわたり
蜻蛉
自惚れに汗かく世話をおだてとき
幽谷
自惚れが汗かく世話をおだてとき
光郎
自惚れがタイトから出る膝小僧
敏子
自惚れが廻れ右した沈み様
吉備郎
自惚れてこそ人前で物が言え
和楽
自惚れをおだて取まきおこす氣
狂二
自惚れのない一等賞テップ切る
笑太
自惚れのキヤノンが人を分けて出る
淀月
男見る目のない奴がこうも居り
可住
自惚れの騎手がそろそろ遅れ出し
夜潮
自惚れて踊って見たい日が続き
圭井堂
自惚れにいきなり鉦が一つ鳴り
繁太郎
自惚れがあつて下積みあきり出し
雄々
自惚れが今日バツジを変えて出る
八九寸
妓まじえて自惚れへの謀りごと
庸佑
自惚れが自己宣伝に終始する
川島
自惚れの椅子がくるくる廻つて

一路集

自惚れているが財布はきつう閉め
操縦法夫自惚れさして置く
藤波
出る幕でないのに自惚れ出て打たれ
流行があわす自惚れいららし
与根一
釣れぬ日のビクは見えない釣天狗
豊年
自惚れを親が教える七五三
白葩
自惚れて御座る娘に虫がつき
定月
未婚の女皆我がものと自惚れる
雄声
自惚れの強い女で氣が多し
卯之助
たまさかの活字自惚れ見え廻り
静水
五十円拾う間自惚れを忘れ
佐代子
自惚れの鼻をひし折るミス審査
旭峯
自惚れては船を引算して答え
隆史
自惚れの強氣が背中みせてすね
可十
自惚れていた娘の方が売れ残り
幸子
自惚れへ妓上手にたかつて来
美秋
虚栄張る自惚れ女よく喋り
古心
自惚れへ期待外れの返事が来
十九平
自惚れへ子供の間はずんどすぎ
圭水
秘書という自惚れがある遅刻なり
昌魚
自惚れの顔に衣裳がついて来ず
初甫
紅バラの様に二十才を自惚れる
敏子
美容師を泣かせ自惚れやつと立ち
藤波
はめてやれば自惚れくさばついて来ず
敏子
自惚れた女を借りる膝枕
鶯名
自惚れが屋台の酒を嗜なまず
鶯名
自惚れた顔を小皺が曇らせる
実男

満期

河村日満選

軍配を自惚れ自分だと思ひか平
天
手を握られて自惚れの危い日蘇太
軸
自惚れが妬くほど惚れた人が出来
満期来てテレビ見る目も明るそう
和楽
満期になる保険をカタに金を借り
尚史
たのもしの満期女房のブラン出来
北海坊
満期まで待てず証書で金を借り
与根一
満期まで生きぬと保険屋に見られ
静水
満期まで諦めきつた職に生き
美秋
当てにした満期へ友が無心に来
惠二朗
保険満期よくもこれまで来たものぞ
吉枝
質札の期限へ心安からず
笑太
満期まで待てぬ子供の伸びさかり
南牛史
賀状にも疎遠と満期以後の便
夜潮
ロマンスを残して満期国を去り
萬女
満期迄動めた女史の白い髪
一鶴
利子一つ入れて質屋を低う出る
東天紅
夢よもう一度満期へ無理をさせ
兼治郎
職歴を満期除隊へさかのほり
圭水
親類の足しげくなる満期前
古心
みつちりと満期がけた腕の刃え
宗太郎
頼母子を満期周際に逃げられる
繁太郎
戦前の保険満期の日も忘れ
義夫
定年満期隠居暮しが又苦勞
実男
満期まであと二十年ある保険
圭井堂
満期後の職へ口ひげ邪魔になり
敏子
へそくりが満期になった娘の晴れ着
敏子
月掛の満期短かい様に云い
慈雨
裏長屋刑の満期を待つ親子
輝男
勧誘員満期の時を云いならべ
代仕男
もう満期ですかと勧誘ぬかりなし

新春賀謹

川柳雑誌社ハワイ支部

ウイロー社

同人一同

謹賀新春

川柳家の御多幸を祈る

宮政周防

ハワイ・アイエア

小西無鬼
兵庫県多紀郡篠山町
小川町一

福田妄夢
豊中市大字牛立二四九

同可保十九蘭和三夢雄八雄藤雪隆愛む木卯句庸鵜昌敏萊山鰐箔美不
住夫平和郎生聲寸々波峯場鳩之念坊佑汀男子春坊蛤川風音村
白

戦前のお金ぐちになる満期　ひか平
雲も秋満期になってする散歩　可十
専従から戻り素直に待つ満期

菊田いさむ選

百万円ためれば別の慾がわき
 慾はもうただ晩酌の一合だけ
 壳に残り買ひ手が付けぬ慾を出し
 慾のない人だと次席いたわられ
 慾の皮張った同志でウマが合い
 隅へ隅へネズミは慾を蓄めていた
 慾に目が眩んで身成り構わない
 慾の無い奴めと慾張り嘲笑い
 先祖から慾は遺伝のような家
 慾出して浪人ばかりの息子持ち
 袋ごとサラリはりの息子持ち
 いじらしい慾玩具屋へ連れて来る
 慾な家知って行商寄りつかず
 慾望は働きたいだろと云うベッド
 百円を使うに女の慾を見せ
 文化勲章まだまだ勉強したい慾
 東大へ親の慾目を出す願書
 慾張った濡手の栗へいたい税
 慾だけは人一倍の懐手
 ポーナスへ子の慾妻の慾ぶら下がリ
 リベートの裏にからまる慾の皮
 手術台生きたい慾で乗っている
 慾な人だったと語り草にされ
 慾目にも美人に見えぬのを飾り
 舞台慾捨てて女房に徹する氣
 私慾ではないと違反を恥じられず
 慾云えば只目当りを云う借家
 慾の皮五十の皺へきびしすぎ
 この上の慾が師走を寒くする
 愛鳩
 八十九才
 ひか平
 雄々々
 たもつ
 万女
 鶴汀
 圭井堂
 祥月
 敏子
 生薑
 蘇心
 蔭木
 むじな
 与根一
 堅持
 宗太郎
 八十九才
 光郎
 義夫
 雪美
 佐代子
 美音子
 灯子
 十九平
 孝風
 進之助
 笑太

慾云々は看護婦一人付けてはし
 慾のない官吏を商人もて余し
 生きる為の慾に悲劇がつきまとい
 慾張つて見ても家裁は取りあげず
 慾深と云われとうな哉身銭切り
 成功をすれば名譽もほしい慾
 がめつゝ奴慾の皮をつっぱらし
 大臣になつても慾を捨てられず
 煩張つて両手に持つて小さい慾
 治りたい慾まむしきえ口にする
 慾の皮張つて益々脂ざり
 役得の慾が汚職にまで伸びる
 慾張つた履歴書どれも不発なり
 親の慾わが子は善人だと信じ
 停年の慾は静かな家を建て
 よく喋べるのがやっぱり慾深し
 理想には遠い子の慾妻の慾
 福引の慾はマツチと妻揚枝
 もみじの手一杯の慾知れたもの
 食慾が少うし出て来た快復期
 顔のしわ慾の深さをきざみ込み
 立退きへ慾も手伝う座り込み
 慾のない子ですと馬鹿な子をかはし
 養老年金まだ十年は頂く気
 兄の慾があいてる乳房持て遊び
 慾の無い話美談として残り
 天井で珠を売りたい慾を持ち
 土壇場の慾神前へ掌を合わせ
 別荘を持ていよいよ慾が増し
 勿体ないことにしておく妻の慾
 大海へ竿一本の太い慾
 人
 蟻の慾身の十倍も引いて行き
 地
 慾のない顔箒持ったまま眠むり
 天
 拾うて来たくじ神だなへ供えとき
 軸
 慾のない顔で尼僧は落葉焼く
 一鶴
 どんたく
 保夫
 圭水
 惠二朗
 白葩
 吉備郎
 義夫
 淀月
 雄々
 木魚
 保夫
 卯之助
 隆史
 雪峰
 惠二郎
 兼治郎
 敬太
 ひか平
 古心
 庸佑
 生薑
 昌男
 豊年
 代仕男
 昌男
 夢路
 静水
 たけお

川雜豐中支部

戸田古方

黒川紫香

村上ゆする

竹
内
圭
三

小泄しけお

永 麟 弼 平

桶高真屈子

祭日いさむ

林本黑天子

河内長野市西代

三三〇一一二

之
日
來
上
月

本日見二良

卷三十五

田垣方大

市水島寿町三ノ三

洞
町

朱屋

店

真多

水博

吏

日
返

—

一月

1000

柳 展 望 界

句会

▼本社新年句会は成人の日の一月十五日(金)

午後一時から日本橋北詰東入る大阪観光ホテル五階(エレベーター御利用下さい)大広間で開催する。柳友の新春初顔合せであるので一人でも多く御出席願いたい。

▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)忘年会は十二月二十二日(火)午後七時半から法善寺



十二月六日トップを切った川柳雑誌社の忘年川柳大会の情景・路郎主幹の柳話の一瞬(多久志撮影)

会は十一月二十二日竜泉居で開催。▼川柳松江支部句会は十二月十日夜、矢道湖畔のなわ館で開催。▼広島川柳会第一例会は十二月六日午後一時から慈仙寺で開催。▼石井照平氏(豊中市)喜寿祝賀川柳大会は十一月二十三日豊中中央公民館で開催。▼ひろしま川柳会の長老玉井虹楼追悼句会

消 息

▼路郎主幹夫妻は十二月十日近畿日本鉄道の招きで大阪名古屋間直通運転記念の新ビスターカーに試乗された。▼須崎豆秋氏(大阪市)は十一月中頃に胃ケイレンで何十年来の無欠勤のレコードを破り四、五日休まれた由、も一つのレコードは川柳のあらゆる句会に全没になったことがないそうである。▼丸尾潮花氏(大阪市)は十一月十五日村山光輪氏藤村梨花さんと滋賀県西明寺の奉納舞踊に出演された。▼松江梅里氏(大阪市)経営の寿司店「大万」アベノ橋近映地の

年賀状について

郵政当局と全連の労組がゴテゴテしているので年賀郵便どころか一般の郵便物に対しても不着、延着、誤配の不安を感じて居ります。既に忘年句会の案内の不着、延着、十二月号の不着、延着等でお互に迷惑をして居ります。この際いつ着くやらわからない年賀郵便だけでも、郵便局に手数をかけない方がいいと思いますので、こ

麻 生 路 郎

勢線走る」の句信を寄せられた。

▼高鷲亜純氏(大阪市)は十一月三十日湖崎眼科に入院縁内障の手術を受けられ目下自宅療養中の由、一日も早い御快癒をお祈り申上げる。▼石坂新雪氏(米子市)は実姉の死去の報に接して新発田市へ帰郷、「各駅でズドンと止まる旅疲れ」の句信を寄せられた。

富士野鞍馬

東京都港区麻布宮下町三〇番地の二

江口証券

金泉萬樂

自宅 大阪市東区北浜一丁目路本町二ノ六八九

川柳雑誌社鳥取支部

鳥取川柳会一同

菊沢小松園

大阪市阿倍野区王子町三ノ三四電話 六六四四番

木口賀峰

吹田市松ヶ鼻一、一三七ノ六

不朽の人々



羽曳野川柳会（羽曳野市）で選句する川村好郎講師（大阪府）

試作品として長男に生れ

（好郎）

同じメーカーでありながら頭の毛は薄いし、男前は落ちるし、声は悪いし、字は下手だし、ゼニは無いし、川柳はボチボチやし、いったい兄貴らしいところはどこか。と梅里はうそぶく。正にその通り。梅里は同じ工場で第三番目に出来たので一級品と心得ているらしい。しかしこの試作品五十有余年経つが世に捨てられもせず案外持ちがよい。

▼山田季賛氏（広島県）は十一月六日朝、物品配給のため同乗していた貨物列車が、トラックをはね、トラックは大破という事故に会い、持ち合わせのカメラでパチリと撮影、これが中国新聞六日の夕刊に掲載された。▼中島紫痴郎氏（長野県）から湯田中は昨十二月六日夜雪が少し降ったが、志賀高原はもうスキーが可能であるとの寄信があった。▼川柳噴煙吟社（熊本市）は三十四年十二月の満十周年記念事業として、全国の川柳作家に呼びかけ自選句集を出版する計画であると。▼川柳寺復興後援会の募金は三十五年一月末日まで延期された由、御送金は左記へ直接お届け下さるようお願いま

す。東京都台東区浅草三筋町二の十天台宗電宝寺内川柳寺復興後援会（振替東京九六四一六番）
柳書・柳誌
▼国文学解釈と鑑賞三十四年十二月号は揺籠から墓場まで江戸生活百科第一集として川柳を特集している。発行所は東京都新宿区払方町二七至文堂。定価百八十円。
▼「螺」創刊号が十一月二十三日呉市広町末広随喜園内津久楼会から発行された。非売品。
▼林参無子氏（豊中市）は夢虹と改号された。
▼守屋宝山氏は大阪府高槻市古曾部一四五鉄道弘済会宅三〇三号へ

転居された。▼菱田満秋氏は豊中市本町四丁目八二番地へ転居。
甲
▼稻葉鳩花氏（大阪市）の嚴父は十一月二十日老衰のため死去された。行年七十八、謹悼。
正 誤
▼前号二四頁下段二行目の句、片身とあるは形見の誤りにつき訂正。
（薫）
常任理事会―常任理事
会から
月十九日（土）午後七時から三休橋南詰西入中島小児診療院階上で開催。一、昭和三十五年事業計画に關する件、其の他を審議九時散会した。

飛・燕・往・来
★高鷺亞鈍氏より（大阪府）
一 路 郎 宛
啓、去る六日（日）強引に退院、昨日まで眼帯封印つきのまま手を曳かれて通院していましたが、漸く本日許可を得て眼帯を外しました。暗黒・懊惱のルツボから這い上った感じ。明るい世界に甦り、いま、眼にうつるものみな拝みたい気持ちで一杯です。目下安静を強いられ、読書執筆は固く禁じられて居ります。年末年始の欠礼も已むなく、先是御詫び迄、
早々。
（十二月十日）

木村千容
倉敷市新川町千宅番地

川維高知支部

大西迷窓

高橋幡蛇

杉谷湖山
鳥取市職人町

謹賀新年

西尾栞

大阪市南区西振町三〇
電話西五九六三番

交通局川柳会

北川 春巢 富岡 淡蝶 浜島 与呂 児島 正志 福島 孤舟 岡島 文夫 森田 一の 米田 凡々 藤田 酔々 前田 浩々 草深 雅雅 山橋 雅万

不朽洞会

理事会総会記

十一月二十二日。晴天。地下鉄の心斎橋駅を降りると、失明の柳人香林氏の手を引いて会場の大成閣に向う若菜夫人のお姿が目についた。実に美しい姿だ。続々と



(講演中の路郎主幹)

二十数名の理事が参集、最後に路郎主幹が社の林さんに付添われてお見えになる。

会場正面には

- 司会 川村 好郎
- 挨拶 中島生々庵副主幹
- 講話 麻生 路郎主幹
- 表彰 菊田いさむ
- 議事 児島与呂志
- 議題 議長 土井 文蝶
- 一昭和35年度事業計画
- 二常任理事増減の件
- 三其の他
- 席題 「結び」 清水白柳選
- 「夜長」 後藤梅志選
- 閉会 懇親宴

と会の次第が発表されている。路郎主幹の講話は、「月ロケットが成功し、月の裏面の写真が発表される世の中である。こんなことは出来ない」と投げ出しては何か完成することが出来ない。不断の努力を続けることが大切である。芸術・芸能に関する限り三十年精進し続けなければ一人前とは云えない。川柳が俳句に近づいた、俳句が川柳に近づいたと云うが川柳の本質、俳句の本質と云うものがある限り、短時日に接近する客のものでは決してない。サラリーマンが百姓の糞のようなものをつけていると一目で判るようでは駄目、他の文芸の真似ごとではなく、同化してわが物にしてしまわなければならない。」と一同へ川柳精進への真摯な情熱を促され、デンマークのステイマン女史歓迎の時に経験された女史の目のつけどころの細かさを述べられ、自身の心の外、心の内を通して此細なことをも見逃さぬ態度を常に持つべきであると結ばれた。



(会場スナップ3景)

すばらしい
着心地
蝶矢
シャツ

次いで句会部の菊田いさむ・児島与呂志両氏の本社句会尽力に対する表彰式となったが、若い人達の表彰は劇的なことで、甚だ意義のあることに思えた。

議事は香林氏の建設的な意見を中心に議題に添うて活発に論議され、三十五年度に迎える川雑四百号記念句会や、川柳雑誌販路拡張等の案件をも検討して、席題の披露に移った。

常任理事に木谷竹荘氏、橘高薫風子氏。理事(A地区)に酒井ひか平氏、小浜牧人氏、河相すむ氏。理事(B地区)に石居高志氏、高野むじな氏の諸氏が今回新しく担当された。

懇親宴は出席者全員が残り和やかに開かれたが、今回は地方理事の出席者が皆無で一抔の淋しさを感じたのは筆者だけではなかったであろう。散会は六時。

(橘高薫風子記)

謹賀新春

謹賀新年・

(ABC順)

支部 支野倍阿社雑誌柳川

事務所 大阪市阿倍野区旭町2の110 電話 2082 (木村十悟方)

- 伊達 堰子
- 不二田 一三夫
- 今西 生薑
- 金井 文秋
- 加藤 繁雄
- 河井 庸佑
- 木口 賀峰
- 木村 十悟
- 菊沢 小松園
- 松江 梅里
- 小川 恒明
- 新川 博也
- 須崎 豆秋
- 高鷺 亜鈍
- 辻川 喜仙
- 山本 葉光

須崎 豆秋

大阪市阿倍野区旭町
三丁目一四番地



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社忘年句会(大阪市)

12月6日 午後六時

会場——大阪観光ホテル

句集「私達」出版記念会を開いた大阪
観光ホテルが会場である。新春句会もこ
こで催おすことになった。主幹久しぶり
に柳話と選をされるので会場は活気がみ
なきる。全出席者22名ときまっていたが不朽
洞賞杯は新春句会で決戦となった。新鋭
種谷敏明氏の大手柄と、支部対抗ではに
しなり支部本多清人氏の優勝が光彩を放
つ。閉会後懇親宴もにぎやかに一九五九
年のフィナーレを飾った。(F)

出席者——路郎・一三夫・与呂志・开平
・白柳・旅風・直人・正一・半歩・徹也
・黒天子・昌男・柳安子・清子・栄・満
・操子・きさ子・薫風子・夢虹・万榮・潮
・花・柳志・月都・清人・文秋・圭井堂・
生々庵・小石・淡舟・阿茶・武助・梅志
・水堂・雄声・晃・いさむ・庸佑・多久
・志・女・笛生・葉・す・む・保美・凡
・志・南宗・舟遊・繁雄・満秋・紫香・高
・志・梨花・菁風・十悟・悦子・敏明・貴
・山・春翠・好郎・狂二・吸江・つゆ・春
・葉・一十・一瓢・葉乙女・静馬・梅里
・登紀・進之助・いわを・ともゆき・無
・鬼・良子・古方・宏子・霞乃

兼題「足ぐせ」 中島生々庵選

履物をまっすく減らすのが自慢 花 宵
うっかりと足ぐせ悪い下駄を借り 句念坊
足ぐせも柔道二段らしい下駄 宗太郎
足ぐせへ師匠躰ける目のきつき 八九寸
裾模様椅子に組んでる足の癖 八九寸
五尺八寸内輪に歩く癖をもち 雄 声
振袖の足をそろそろとくずれ出し 操 子
突っかった下駄に足ぐせはよくなり 白 柳
蹴るようになる足ぐせ大が吹え 貴 山
ついて行く方がヒヤヒヤする踵 圭井堂
ハネあけて足ぐせ妻にほやかれる 井 平
足ぐせが悪るおまなと釘を打ち どん 平
コッポリを履いても外輪で歩く 水 堂
だぶだぶの靴一足が残って 晃
足ぐせを芸の一つに数えられ 吸 江
足ぐせが父親に似ず病みつつ 与呂志
足ぐせを出して角力に今日も負け 鳥 耕
足ぐせの今日は左右を替えて出る 昌 男
新郎の足ぐせがもうわかれかけ 保 美
茶の味をおぼえ足ぐせなかり出し きさ子
足ぐせに一汗かいた三番更 阿 茶
八頭身に育て足ぐせ悪いなり 夢 虹
足ぐせをどうにかせと靴も言い 徹 也
まわり道する足ぐせの退社ベル 進之助
すぐ足を組む友達で気がおけず 夢 虹
下駄履いて出たのに靴で戻って来 一三夫
足ぐせがさても合わない宿の下駄 悦 子
足ぐせを笑ひ合える程の仲 柳 志
足ぐせも言うて靴屋へ頼んどき 一十
足ぐせで師匠が知れる舞をまい 柳 志
ハイヒール島田の時のくせが出る どん 平
さつそうと内輪に歩くおなこは 雄 声
後さしに寝て足ぐせをつつかれる ともゆき
足ぐせは女のゲタをはきたがり ともゆき
いけずやと靴やのおくさんにはわり 水 堂
ようこんな減りもする借りた 敏 明
足ぐせをやつと支えたハイヒール 生々庵
兼題「ドライ」 北川春葉選

割勘でまた婦人科へ行くドライ 宗太郎
労働歌ドライ娘の黄な声 山椒坊
親の義務借りた六法でもドライ 正 一
母親にまでもうつってきたドライ 古 方
ハンサムでドライで持てる新人杜 春 翠
ねだるときはドライの娘に見え 静 馬
香煙ドライ殊勝に手を合わせ 柳 平
はちきり若さなドライまきつら 井 宏子
本当の恋ドライにはけつまずき 潮 花
孝行も出来そうもない爪の色 梅 里
氣に入らな戻つてくるとドライ嫁 多 志
十二月すしドライになって見る 青 風
弟のドライを兄はかばうなり きさ子
金がなくればドライはもう別れ 十 悟
ぶつつけの番へもドライはけ 笛 生
裕ちゃん黄色い声もドライなり ストレートでよしカタルでよしドライの娘
あれよあれよと言う間にドライに牛耳られ 進之助
元軍人ドライな嫁と折れ合わず 小 石
グッドバイも次の恋拾ってる 清 子
見かけほどドライではない日記帳 狂 二
役員にドライを入れてもめつつ 白 柳
貞操も家名もドライうけつけず 圭井堂
口笛で向こうも挨拶したドライ 徹 也
ドライ今日日本娘のよさで嫁き 黒天子
パパさんに保険の額を上げさせる 月 都
したいことだけやないかとうおける す・む
ドライでも父親だけは苦手なり 淡 舟
お祝いになにを呉れると聞かせる 夢 虹
テレビ見て泣く父親を可笑しが 水 堂
ドライ歌手うける層もドライなり 阿 茶
賑かさ紅一点のドライにて 圭井堂
御曹子妹のドライけなるが 静 馬
ドライ族重役に肩叩かれる 梅 志
ああドライ見せつけられてふられよう 徹 也
死ぬかな恋をドライに割り切られ 昌 男
ちやつかりとドライの顔を利かせて来 一三夫
猫までドライがうつり家を明け 小 石
ドライにもなれず三十娘にて 与呂志
ドライとは別母親の年を案じ 山椒坊

兼題「過去」 若本多久志選

過去秘めた娼婦へ街の風寒く 山椒坊
わが過去を追うて流る千切れ雲 花 宵
過去へ鍵かけて二度目という御縁 保 美
古傷を胸に畳んで角かくし 進之助
嫁ぐ娘の過去にふれたくない話 蘭
冗談を言ったつらさが過去に触れ 徹 也
過去の人もうマスコミはかえり見ず 一三夫
過去の経歴だけが名残なり 半 歩

味のコーヒ
モダン 川柳
心 齊橋大丸北の辻東へ
御 門
TEL 07 6684
御集会には階上御利用下さい



しなびてゐる刺青過去を物語り
地味に着らうへ過去がやはり出る
黒板のように消したい過去があり
話過去に触れば女目になり
世に後れ気味で戦前ばかり言い
色即是空七色の過去を秘め
過去は過去秘書鄭重に追返し
意見する親にも同じ過去があり
どんな過去もつニコヨンか聖書読む
今にして憶れた動機の過去を悔い
修道尼過去を知りたい眼と出合い
過去は言うまい空があるかきり
尼美るわしお七のような過去を持ち
結婚写真ない言訳は母の過去
過去は過去俸せだけ折る母
履歴書のブランク暗い過去を持ち
仕合な過去あり涙見せず嫁く
打明けた過去を夫は笑うてくれ
あの夜から私に過去がつきまとい
暗い過去秘めて眉曇きつく引き
どやどや淋しい過去のほくら持ち
拾貰のいも背負つた過去もあり
御米迎洋んできつぱり過去を捨て
貧乏はしても寂しい過去はなく
割れ鍋の過去なつかしむ令夫人
アルバムのひとと過去がまたうき
はまたつた過去のこした喉のきず
熟章をながめて父は過去に生き
社のピンチ救うた過去は忘れられ
呑み仲間互の過去にふれんとく
過去はもう水に流したコップ酒
心中の片われと言う過去を負い
過去秘めて心と別なアイシャドウ
同僚がほしくて過去をみじめにし
墨染の衣悲恋の過去を持ち
五十年水の流れのような過去
過去はうらあうと好きな好きな人
思い出を過去へ追いや産着縫う
老婆フト島田髪の過去を想い出し
過去のこと許すと言うも男なり

柳宏子
青風
清子
夢虹
梅志
保美
圭井堂
一栄
晃
圭井堂
宏子
きさ子
敏明
南宗
昌男
潮花
清人
清江
吸香
清人
満秋
水堂
圭井堂
昌男
栗虹
正一
一瓢
柳志
一十
六童子
昌男
井平
井平
春翠
保美
梅志

古疵のいたみをそつと妻かばう 狂二
過去秘めて母強く強く子を育て 与呂志
暗い過去秘めて夫の愛に生き 多久志

席題「相談」 友淵貴山選

相談に来た銀行の厚い壁 柳志
中腰で金の相談聞いておき 好郎
相談は昔の事にふれて来た いわを
相談へ友達甲斐のある返事 梅志
弱り目になって女房に相談し 多久志
つんばききとおかれて相談役と言ひ 柳宏子
ひと事と思えば派手な相談所 潮花
相談に来いとなかなか会えぬ 凡吉
相談をされて相談しに行けず 良子
相談をする人もなく爪をかみ 昌男
同郷という相談が気味悪し 文秋
相談が出来なんだかと死んでから 多久志
捨てられて相談欄の知恵も借り 多久志
寄付の相談寄りが悪いなり 清人
相談に帰れば母は察して居 十悟
相談と言う名でいける口が寄り 庸生
心中をする相談も十二月 一栄
相談の下相談のいる相談 保美
相談へ知恵だけならば貸しめし 梅志
オクターブ下げ相談がまだ続き 花子
よくせきの相談膝をくずさない 柳志
相談に乗れる男のきやしやな指 柳志
相談をしたのでつまらぬ金が要り 柳志
女連れトイレへ行くにも相談し 柳志
別れる気相談なくに子をおろし 柳志
どん尻に來て相談をぶちこわし 柳志
背を見せて女相談したいらし 柳志
相談はなあんた養子の口かいな 柳志
相談にのろやないかと若社長 柳志
相談欄いと簡単に身をささげ 柳志
すぐ賛成するのへ先に相談し 柳志
どうせろくな相談でない座りよう 柳志
そこんどこが相談でね坐り込み 柳志
何故相談に來んかと叔父に甘い過去 柳志
りベートの相談社長室静か 柳志

席題「早足」 木村水堂選

悪友の声に早足ふり向かず 文秋
入口へ来てから急に急ぎ足 柳宏子
早足で来たのに彼女待つて居ず 十悟
早足で帰れと亭主飼育され 清子
早足はこの酒屋に借りがあひ 雄声
ボケットの貰与が足を急がせる 保美
早足に看護婦が来る医者が来る 圭井堂
早足で朝刊配る子の元氣 清人
早足のくせどこやらに老い意地 梅志
早足で来て無駄話して帰り 一栄
階段へ来て早足の列とまる 一三栄
早足でデイトをすれば気ぜわしく 多栄
早足で帰って妻にどなられる 多栄
肥車の横早足で通り抜け 多栄
早足の割り時間に気がかけず 多栄
早足がツーステップになるボーナス 多栄
早足をじまんでいて乗りおくれ 多栄
早足できた橋上待ち呆け 多栄
早足のふたりを放っておく理解 多栄
重役がみな早足で何かあり 多栄
早足で歩くかに暮れ気分出す 多栄
早足で進う約束のレストラン 多栄
背の低い殿りの子は走りぬ 多栄
足早やで抜ける行く手に赤い羽根 多栄
早足の娘の胸にあるかくし事 多栄
早足の鼻までつまる十二月 多栄
嬉しさの児の早足へついて行き 多栄
早足で子供まいたが気にかかり 多栄
早足の若さにのせる唄になり 多栄
質屋から早足出たり入ったり 多栄
早足へ共同便所見つかからず 多栄
早足で妻は追加の瓶を提げ 多栄
早足になるとほとんどの歳になり 多栄

ふところ手猫をけつてる十二月 与呂志
温泉の宿に妻ものびのふところ手 生々庵

胃潰瘍を

内服でなおす

潰瘍の創面に直接働いてニッシェに肉芽を盛り新しい粘膜を新生させ且つ副作用は全然なく胃痛を迅速に和らげます。一回四錠ずつ一日三〜六回使用致します。

メサフリン

錠 一〇〇錠
五〇錠

七〇〇円
三八〇円

エーザイ株式会社

高血圧

浮腫・妊娠中毒に
クロトライドの10〜12倍強力な

ダイクロトライド



ふところ手まだ別が付かぬま湯の街を誰はばからぬふところ手ふところ手無口なところが頼もしあふ来たらう行くつもりふところ手ふところ手オチンチがよく似合ふところ手くくれるマツチはもつときふところ手人の流れにさからわす丸やきの湯気が出ているふところ手ふところ手葬儀委員たのまれるふところ手腕が伸びてゐる頸にふれ又何処へゆくのがふとふところ手ふところ手今日も金策出来ぬまふところ手に取り開かれたへは將棋貫祿もついた社長ふところ手ふところ手したまのれん分けて入りふところ手金の思案はまた出来ずたこ焼を飽かすに見るふところ手ふところ手しつくり値切るつもりしふところ手やお口火を切る構えつかむだけつかに帰るふところ手指図するアゴだけ動くふところ手普請場を一まわりのふところ手運ちゃんに怒鳴られているふところ手ふところ手立ち飲まふところ手ボートが鎮座ましますふところ手香具師の輪を遠く見てふところ手ふところ手五円の釣りふところ手猿父の紐が切れるふところ手押売りが腰を浮かせたふところ手ジエント機をボカンと見ているふところ手道問えばあごをしゃくつたふところ手

文 翠 秋 春 翠 榮 雄 青 風 木 堂 貴 山 生 遊 舟 庵 翠 半 歩 武 助 柳 宏 子 操 子 登 紀 梅 志 南 宗 一 三 天 一 十 木 堂 春 翠 春 翠 梅 里 貴 山 高 志 潮 花 圭 井 堂

川 雑
ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起選

隱居の身運が来るかと夢を追ひ年寄の冷水 隱居煙がられベンションの暮し仲よい尉と姥隱退へ余る元氣持て余し近づいた隱退知る夜眠られず孫の嫁はめて隱居の処世術笑有猫と居る隱居の父のその猫背峯円故郷はドルで楽しき隱居の身割り切れぬまに隱居の帰化準備食う心配なくて隱居は無聊なり子供らに隱居は好かれ嫌がられ隱退の裏に噂がまだ続き平八郎柳葉快夢起スードショー入る隱居は気が咎め人柄のよい子もあつて子沢山子の養母の人柄うかがわれ人柄をいり番頭は揉手知らずお人柄争われぬ元貴族お金では買えぬ人柄親ゆすり重宝な人柄うまく利用されあの人汚職なんぞとよくまあ

吟 声 エ ス 子 周 防 泉 木 美 潮 笑 有 峯 円 海 晚 舟 須 磨 子 紅 溪 平 八 郎 柳 葉 快 夢 起 惠 津 子 緑 星 山 茶 紅 太 浅 風 舞 座 草 風

川 雑
阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

コロケを一番上に市場籠清人デパートへ晩のコロッケ買いに寄りお人よしそは枝ばかりくつてゐる気の弱いとこへそは枝もつてゆきそは枝へ給仕だまつてお辞儀するいらん事言うてそは枝食わされる下請の社長はいつも外まわり同業者おだて下請さす氣でいキー叩く喜怒哀楽は指が知り恋心ピアノに乗ってゆれてくる保母志願ピアノも少し弾ける腕本籍は何処であろうと添う氣でい本籍は聞かずに知れる国訛り仲人に先ず本籍を聞いている

名で区別せねば解らぬ本籍地生薑毆られて神田の生れとも言えず本籍の番地車道のあるところ 白 柳

風船へ一息ことのふくれよう一息にまぐし立てられ言いよう若者の無茶が大胆そうに見せ大胆に勝負にかけける鉄火肌大膽に渡ったあとで身の毛だつ宿願を半分だけして見るテレビ公聴会半分はどうでもよいのが来半分でも取れりやと貸している弱み

川 雑
淀川支部句会 (大阪市)

木村水堂報

川 雑
にしなり支部句会 (大阪市)

(本多柳志 入賞祝賀句会)
(石倉旅風)

後藤梅志選

・ 謹 賀 新 春 ・

橋 本 緑 雨 大阪市東住吉区平野 西ノ町八三	森 本 法 泉 子 鳥取市中町四三	福 田 丁 路 高槻市大字氷室六九 二の四	野 村 初 甫 辻 白 溪 子 松 川 杜 的 阿 万 万 的 永 尾 永 断 吉 原 紅 月 宮 口 笛 生 植 村 客 遊 子 塚 脇 笑 太 都 倉 求 女 正 本 水 客	大 鐵 ・ 天 鐵 川 柳 会	大 阪 遞 信 病 院 烏 ヶ 辻 川 柳 会 (イロハ 題) 池 戸 桃 村 市場 淡 食 子 生 越 正 徳 乾 静 夫 橋 本 幸 男 半 田 夏 生 長 谷 川 鬼 風 西 口 弘 西 辻 竹 青 尾 崎 方 正 小 野 木 凡 平	若 林 草 右 仲 谷 ハ ナ 子 榎 本 露 見 真 野 康 彦 小 沢 史 雄 足 立 春 雄 木 村 喜 男 北 川 春 葉 木 谷 竹 莊 森 下 愛 論
-------------------------------	----------------------	-----------------------------	---	-----------------	---	--

家を案じて妻には妻の旅ごころ 酒やめて酔ぬけたような顔になり 電柱へ話しかけたい程に酔い 折に触れ季節に触れて持つ酒盃 悪友の情けサツ迄来てくれる 友情を尼僧くすぐったく感じ 返せない金と友情知りながら 祝電の一つ政治の匂がし どきくさの中に祝電忘れられ しい酒があるかと寒い屋台店

蕨風子 晃 靖 真 旅 風 柳 志 白 柳 満 潮 青 風 保 美 志

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼報

薬つかむ気がのぞいてるやせ葉 肥つての方が奥さんと教え 天高し娘は肥り父はやせ 神様をウンと言わした母の愛 尻が肥えストスト言うて困らせる シャッターが切れてOKで皆笑い 口づけもOK嬉しい日も近い 淡い好みが恋の火を包み 淡い茶で通夜の睡むさを紛らし 追い返えすつもの淡い顔を出す 文化財芸の淡さに酔わされる

多津男 秋 月 凡 志 万 世 住 黙 翁 凡 志 孝 風 枝 葉 美 千 代 岳 詩 平 鬼 無 鬼

川維 西宮支部句会 (西宮市)

若本多久志報

婚約へ課長一肌ぬがされる 腹立ちを露骨に障子音をたて 障子みな彼れ達者な子が育ち 老夫婦言うこともなく虫をきき もてなしの菊へ障子をあげ放ち 破れてる障子の穴から用を足し 虫の声妻がボツリと話しかけ 人の眼へふれたが虫の最後なり 肌見せる為に作つたような服 秀才の子で親の職あきらめる

夢 路 球 絵 六 竜 子 佳 以 子 花 美 寿 栄 敏 明 満 秋 甘 美 木 綿

車掌からリレー救急車が走り 秀才の幼馴染へさがす職 後から走るリレーの子に拍手 言いまけて夜の窓から虫を追い 肌をはめ顔のことはふれずおき 大害地ももうこおろぎが鳴きはじ 口説かれてみた障子を閉めにたち 子にバトン渡してゆう自適する 秀才を女はなみの男にし 落はくの身に秀才の日を言われ 待たされる障子わが家に住みなれ きたる障子の棧がごみだらけ

牧 人 舟 遊 弦 月 半 歩 泰 三 舟 三 司 蕨 風 子 静 馬 蘇 堂 一 十 多 久 志

川維 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選

亡き祖父の笑顔がうかぶつし柿 菊の鉢笑顔で縁は信じかね 菊の鉢笑顔で自慢し説明し 下心あつて笑顔で入つて来 結納金包装だけが見事なり 包装を解けば山の香故郷の味 大穴へ今日も会社をなまける 美しい人だと裏方がまされる

永 幸 七 郎 美 代 魯 木 光 郎 静 夫 醉 羊 一 路 平

川維 鳥取支部句会 (鳥取市)

河村日満報

乾杯を女の方が派手にやり 研究をしますと答弁逃げておき ついていたはずと無灯火叩いてみ またがったとたんこらとめられる 地図にない街が今では繁華街 乾杯にしますと幹事は驚くし 無灯火が来るので無灯火安心し 地図を手に大廻りしたハイキング 犯人が追いつめられた地図の上 乾杯に末座はまだ酒が来ず 選挙戦地図に予想の線を入れ

遊 星 天 邪 鬼 辰 春 秀 和 由 多 香 三 步 多 可 志 若 人 法 泉 子 耕 民

因州紙太閤さんが攻めた地図 川維 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報

泥棒と間違えられた好奇心 好奇心湧かせて終る予告篇 初もん食いみな来てくれてあはひま 好奇心というこににしてついでゆき 好奇心妻のライバル見に出かけ 好奇心七分の見合いまとめられ 好奇心同士が暗い露路へ折れ 好奇心のぞくことやしの目が光り 蟻の列どこまで続く好奇心 好奇心社長椅子へ坐つてみ 結局は何でもなかった好奇心 困地族になつたばかりに見栄をはり 月の裏私に影響ない話 月の人へ夜長を転ぶ毛糸玉 やり手といわれながら借金か返けず 商談にそろそろやりの手奥を見せ どきくさの中で花嫁出来上り 夜長から出たのが嫁の話にて

南 宗 武 助 好 郎 保 美 生 々 庵 文 井 堂 佐 久 良 操 子 雄 声 狂 二 信 太 郎 小 石 古 方 徹 也 き 子 子 摩 天 郎

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

言い負けし妻が強めし瓦斯レンジ 淋し気に布袋の並ぶガスレンジ もう生きる力なくしてガスを見る 結局は位いて無力から逃がれ 靴ぬぐと脚から無力になつて 年寄は呆けた呆けたと便利なり 逆なでをして呆ける顔出来上る 両の手に受けて簡単な餅さよ 塩昆布の誇り芽出度い折り入り 朝風呂を女まだ出ぬ塩昆布 塩昆布を女まだ出ぬ塩昆布

海 三 郎 親 生 磯 崎 一 禎 一 蘭 司 郎 史 崔 雀

川維 堺支部句会 (堺市)

八木摩太郎選

秋あわれ無心の女猫を抱き 虚ろな瞳病院の昼静か

版・写・英・版 技術を語る

親切で早 (I)

四 桑 部 台 木 部 (冒 作 業)

有限会社 東洋写真製版所

大阪市阿倍野区阪南町中2の6 電話 0567・0568

川維 松江支部句会 (松江市)

梶谷冬生報

引越して来ても二号はかくされず 引越のたびに学校遠くなり 歯が痛いのからかと頬杖はつとかれ 引越しに女将は矢張大安日 引越しを貧乏神が先に知り 引越した家とも知らず菊は咲き

好 郎 貴 山 雄 声 狂 二 摩 天 郎

でつち上げのアプリパイから足がつき 与根一 アプリパイがくずれ冷たい日の手錠 まき子 自覚より社究がすぎな若主人 孤呂二 若主人助けを借りる窓をする 三雷波 芸ことはなんでも好きな若主人 祥 月 貧乏で育った故郷が美しい 一 ふる 児 麦を食うて尚貧乏な政治なり 乱 雪 末っ子のあとへ末っ子生れて来 天 痴 人 貧乏がスピードの街をうろつかせ 冬 生 末っ子がいじめられてる夜の膳

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

決算期明日に迫ってあわて出し
甘えてもうらと表を持った人
看護婦に甘え全快 近くいる
宴會に心の奥もみなのぞき
恋人に甘えた声でねだられる
妻不きげんなれど悪友また来し
返答にこまり悪友にしてしまい
悪友に新郎一夜借りられる

川維 貴生川支部句会 (滋賀県)

黄瀬美秋報

へそくりが満期になつてははじめ
満期まで待てずテレビがとけられ
満期まで担保になつて借る話
百万の満期へ地獄耳が来る
大和路へ満期が近くプラン立て
自惚れもあり女房の若く生き
自惚れた顔にも苦勞のしわざ
自惚れのまだ振られたる気がつかず

川維 明和病院支部句会 (西宮市)

西尾青一路報

コーヒーをやめて投げこむ義捐箱
通ぶつてコーヒーの名前並べ
税関を通らぬコーヒーを自慢する
一杯のコーヒーが欲しい秋の雨
ライバルと思う人が好きになり
今日の地位そのライバルをふと
基敵の人柄だけを褒めて去に
ライバルの出世を祝う肚が出来
ライバルの視界を去つた日の淋し
ライバルの人氣へ遠く目をつちり
ライバルの名をはつきりと寝言
肩組んで居てライバルを意識する
ライバルになるとは知らず紹介
象の足鎖が歩調取つて居り
長い鼻タクトのように振つて象

象きょうも腹の立たない顔で立ち
象あわれジャングル知らずジツタ聞き
聞いたこと皆嘘だった裏話
裏話聞けばやつぱり金づまり
裏話もうまぜ返す人もない
裏話十年たつてから分り

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

夜遊びへ近頃ふえた口答え
夜遊びの場所を知つて靴の泥
夜遊びの床にも湯タンが入れて
失窓が大の夜遊びまで叱かり
夜遊びの息子へ母は炭をつぎ
麻雀へ仕事嫌いが夜をふかし
夜遊びの癖灯がつけば落つかず
夜遊びをしては流行歌をおぼえ
夜遊びの金も學費へ結びつけ
気晴しにやうと一本持つて行き
気晴しの散歩へ大に吠えつかれ
マスコミが一役買った觀光地
初孫のかくす仕草でみな笑い
かくしたい事は世間が早く知り
気晴しの医者の言葉信じきり

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選 橋本幸男報

パトロール 駈落の仕末させられる
駈落ちのおなかはずでに三カ月
駈落ちへ湖水の水が青く澄む
駈落ちを母うすすに知つて居て
かけおちの日をなつかしむ老夫婦
駈落ちをあやしませる船の旅
駈落ちはおやじをはかる苦肉策
駈落へ都会の風は冷たがり
人前は酔うたふりして千鳥足
折箱の紐だけ提げた千鳥足

千鳥足ボリスにからんで叱られる
二代目の商才暖簾を盛り返し
商才も欲に過ぎれば罪に落ち
女まで世話して商才抜けめなし
商才のある女房を煙たがり
大阪で商才の弁見て帰り
商才をたつぷり見せた十二月

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭木報

入場券台風の日も何のその宏子
入場券買ふ金もない年の暮
入場券元気でネエと云つただけ
神仏も入場券で喰つてゆき
ギリギリになつて貰つた映画券
頂いた入場券でもまれて米
入場券正直者が買つてくれ
入場券二人の席をひきはなし
入場券捨てて両人の旅となり
感謝デー一日限りの入場券
半券へ商魂見せるスポンサー
青切符二枚へ続く入場券
りつすいの余地もいかに売り続け
この顔が入場券の替りする
入場券買っているのに彼れはこ
入場券雨の試合でたられる
入場券テープと仲人氣をつかい
入場券お辞儀をさせる皆を連れ
前売券値段を聞いておじけずき
入場券位いで済まぬ義理があり
入場券買つて待つみの弱さ知り
入場券車窓へまでは遠慮する

正 大坂形水

賀 大阪市東区糸屋町一ノ二

入場券買ふ金もない年の暮
入場券元気でネエと云つただけ
神仏も入場券で喰つてゆき
ギリギリになつて貰つた映画券
頂いた入場券でもまれて米
入場券正直者が買つてくれ
入場券二人の席をひきはなし
入場券捨てて両人の旅となり
感謝デー一日限りの入場券
半券へ商魂見せるスポンサー
青切符二枚へ続く入場券
りつすいの余地もいかに売り続け
この顔が入場券の替りする
入場券買っているのに彼れはこ
入場券雨の試合でたられる
入場券テープと仲人氣をつかい
入場券お辞儀をさせる皆を連れ
前売券値段を聞いておじけずき
入場券位いで済まぬ義理があり
入場券買つて待つみの弱さ知り
入場券車窓へまでは遠慮する

羽曳野川柳会 (羽曳野市)

水田帆舟報

赤い羽根デイトにしかとつけて行き
売る人も皆んな付ける赤い羽根
酔いどれの胸にいがる赤い羽根
シャンだから又買つた赤い羽根
子供より疲れて帰る運動会
次男坊だけが取り柄で嫁にやり
食欲が思わぬ家計赤字なり
あやかってみた草食ひ秋の馬
よく喰べや喰べたで気づかう母であり
もう一膳云えぬ上座の席を立ち
食うよりも食えん体が高うつき
夜鳴きそばすする家族の音もよし
食欲をもてあましてる適合期
久振り逢つたら奥さん變つた
共かせぎ夫がみがく妻の靴
夫婦とも良い人柄で金出来ず
目くばせで用の足つてる妻であり
銀婚を夫唱婦隨で子と迎え
孫も無く子も無く夫婦静かなり
三天婦違う思いの渡り初め
気が合わぬ気が合わぬ共白髪

鮎と料理と酒

アベノ橋地下映画食通街
千日前 大劇裏
梅里の店

大萬

★大万川柳(第百七回)を募る
兼題「郵便局」 路郎先生選
締切 一月十五日 毎数五句以内
発表 一月廿一日 (店内掲示)
投稿は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

・歩の散の

▼輝やかしい一九六〇年へ巨歩をふみだす新春号を皆様と共によろこびたいと思います。路郎主幹もますます健康で門下のよろこびの上もございませぬ。本年は九月号で四百号記念を迎えるので部員一同ハッキリしています。倍旧のご支援をひとえにお願い申し上げます。

▼表紙を三度刷りにして4ページふやしました。執筆諸家のおかげで「初はめ」を本号にもいただけるとおもいます。佳い年を御迎えくださいませ。(一三六)

★新春句会 ★ 川雑支部

★玉造句会・11日七時、題、はじめ・早熟・空びん★淀川句会・14日六時、題、道・凡人・晴着★にしなり句会・17日六時、題、半生・熟章・マスケ★阿倍野句会・20日六時、題、すべり出し・我流・シーン★33句会・16日七時、題、初笑い・あらたまり・繁昌★浜寺句会・24日一時、発奮・餅・結納・ほろ酔い★堺句会・23日六時半、題、寸志・ぼんち・見合★南海電鉄句会・28日六時、題、本線・あかぬけ・せつかけ★米子句会・10日一時、題、ひかり・六年生・スキー★明和研究句会・10日一時、題、元旦・大空・炭★西宮句会・16日六時、題、初夢・校庭・爆発★岡山句会・23日、題、地下街・筆不精・空地・浮名(会場は従前通り)

本誌定価改正について

紙及び印刷費の値上りはご承知のことと思います。内容の充実をはかるためやむを得ず新年号から本誌一部七十円に定価を改正することになりました。すでに誌代払い込みの分は前定価でサービスさせていただきます。川柳雑誌社

新春を賀し奉る

川柳雑誌社
麻生路郎
中島生々
土井文々
北川春局
戸田白古
清水鍋尾
丸鍋尾柳
真鍋尾柳
水田一三
不二田梅
後藤一三
橘高薫風
西川薫風
黒川紫部
八木摩天
林宏子

新春の本棚に
ぜひ一冊!

麻生路郎著 好評嘖々

針川柳鑑賞

川柳の味わい方、五百数十句

価二五〇円 送料三二円
上質B6版 二五〇余頁
大阪市住吉区万代西五ノ二五

川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇

白 浜 温 泉
ディーゼル急オ2(きのくに)号
なんば発 毎日 12.30
全座席指定制 白浜口まで 620円
7日前から なんば 堺 岸和田
の各駅日本交通公社南海交通社発売
週末準急「くろしお」号
なんば発 土曜ごと 12.55
座席券 7日前から なんば駅で発売
椿 湯 川 海 勝 浦
南紀直通新宮行夜行列車
なんば発 毎日 21.55
座席券 7日前から なんば駅で発売

ご行楽のご相談お申込
なんば駅案内所 (63)1151 (64)8686
南海交通社 (64) 0103 (34) 5038-9

南海電車

は湯は
師心
品やぐ
手で若

ここに座席指定券がある。だから私たちは安心して清潔な快い旅ができる

printed in Japan

(禁転載)

川柳雑誌 第三十五号

定価 七〇円 (送料四円)

昭和三十四年十二月廿五日印刷
昭和三十五年一月一日発行

半力年 四四四円
一力年 八四〇円

大阪市住吉区万代西五ノ二五番地
行印刷人 麻生 幸二郎

大阪市住吉区万代西五ノ二五番地
行印刷人 麻生 幸二郎

発行所 川柳雑誌社
電話 大阪 六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇

募 集

課題吟募集

夕 戸田古方選
ム 杉谷湖山選
火 木村水堂選
大 西八月十五選
女 八木摩天選
女 中島小石選
看護婦 (十句以内) (二月十五日締切)

近作柳樹 (雑誌十句以内) 麻生路郎選
川柳塔 (雑誌十句以内) 北川春郎選
文 章 (評論・研究・感想其他) (毎月十五日締切) 麻生路郎選

投稿規定

投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。
「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限る。



肝臓を強くし
勢力を増す

☆オロチン酸（ビタミンB13）・パントテン酸強化☆

強力ホストン
ゴールド

30錠 100錠 300錠

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

12月10日新年号発売!! 120円（〒12円）

変貌する食品工業
特集 宇宙旅行の食品
未来の食品添加物
日本酒の悲喜劇

必須アミノ酸と日本人の生活
食品と水の関連

◇海外情報 ◇特許告知板

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・酒類・香料等

大阪市北区
本輪河5-5
電話345231-4 食品と科学社 振替 大阪6702番

あけまして
おめでと
う
ござい
ます



マルキフロパン
岩谷産業株式会社

本社 大阪市東区本町3 電話大阪 總 代表3251・8251



一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL 665511-2

初詣

近鉄沿線

伊勢神宮

伊勢市・宇治山田駅下車

橿原神宮

橿原神宮駅下車

三輪明神

三輪井駅下車バス

春日大社

近鉄奈良駅下車

信貴山毘沙門天

信貴山門下車初寅1月3日

生駒聖天

生駒山寺駅下車

石切神社

石切駅下車

吉野神社

吉野神宮駅下車

近畿日本鉄道



醸の名灘



菊正宗

清酒

宮内庁御用達
株式会社 本嘉納商店

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和二十五年一月一日発刊(毎月一回一日発行)

編集 渡辺 金行印刷人

監主 幸二郎 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二十五番地 電話六八八六〇八一

監印 口座 大阪七五〇五〇番

定価七十円(送料四円)